
銀魂劍客浪漫譚

龍羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂剣客浪漫譚

【Nコード】

N4648L

【作者名】

龍羽

【あらすじ】

いつものようにグダグダな日常を過ごしていた銀時ら万事屋に、吉原から一本の電話がかかって来た。

訪れてみた吉原では、謎の天人集団の暗躍に加え、失踪者や身元不明の浮浪者に頭を抱えていた。最早百華だけでは首が回らないと判断した日輪は、かつて二度に渡って吉原を救って来た万事屋の一行に白羽の矢を立てる。

これに時を同じくして、左の頬に十字傷を携えた赤い髪の浪人が、問題渦巻く吉原の町にふらりと姿を現したのだった。

銀月表現アリ。苦手な方はご注意を。

絶賛不定期更新中。

第一訓 空腹は気になり出したら止まらない

1, 空腹は気になり出したら止まらない

からりと晴れた昼下がり。江戸は新宿、歌舞伎町の一角にある、大きな看板が据えられた建物の二階からは、世にも奇妙な音が鳴り響いていた。

「銀ちゃ~~~~ん」

その中でもとりわけ大きな音を鳴らせるのは桃色の髪を左右で団子にした赤いチャイナ服の少女だ。裾は膝より上程度の服に細身のズボンと動きやすそうで可愛らしい格好だ。

「あ~~~~?」

銀ちゃん、と呼ばれたその男は、居間の中央にテーブルを挟んで据えられた長椅子に仰向けに寝転がり、ジャンプを顔に被せて気怠そうに返事とも知れない声を漏らした。黒のズボンと半袖の服に、袖や裾に白い着流しは右半分をはだけさせている。本の下から、銀色の天然パーマの髪が覗く。

「おなか減ったアル」

少女は、その銀髪の男の向かい側の長椅子に座り、じと目で彼に言った。

「あ”~~~~~!?”」

語気を少し強めたそれでもやる気の無い声で銀髪の男?????坂田銀時は返事とも知れない返事を返した。

「おなか減ったアル」

少女?????神楽は、先程と同じ言葉を繰り返す。

「るせーなあー。酢昆布でも食ってろよ」

銀時が適当に答える。酢昆布は、神楽が暇さえあればいつも食べているものだ。

「さっきなくなったアル」

「.....」

神楽の言葉に沈黙が降りる。

「銀ちゃん」

「あ”?????”」

「おなか減ったアーーーーー」

「だからうるせーっつての!」

銀時が長椅子からがばりと身体を起こした。神楽は平然と続ける。

「何か食わせろヨ」

「いい加減にしないよ!こっちだってハラア減ってんだよ!もうお腹と背中がくっつきそうなんだよ!そんなに食いたきゃ、下行つてババアにたかって来い!」

「銀さん、お登瀬さんにはかれこれ4ヶ月分の家賃がたまってるんですよ。今行ったら確実に実力行使で搾り取られます」

神楽の隣に座った、眼鏡の一見どこにでもいそうな普通の少年、志村新八が銀時の言葉を返す。

お登瀬さんとは、ここ、万事屋銀ちゃんの大家さんだ。良心的な値段で建物の二階を間借りさせてもらっているのだが、その良心的な金額でさえ、銀時はまともに払ったためしがない。故に、常に●ヶ月分は滞納気味である。

「大丈夫だろ。だって見ろコレ。搾り取られるモンはもう何もねーだろーが」

「威張って言うなアアアアアア!」

開き直った銀時の態度に、新八が思わず叫んだ。

「どうすんですか！ 今度こそ追い出されますよ！！ いくらお登瀬さんでも、いい加減ブチ切れますよ！」

「んなカリカリすんなって新八ィ。だからお前はいつまで経っても新一になれねーんだよ。いつまで経っても八のまんまなんだよ」

「うおおおい！ と言う意味だそれ！」

ジリリリリリリ

タイミング良く、と言った風に銀時の仕事机にある万事屋の電話が鳴った。

「お、電話電話くくっと」

普段は人にとらせるクセに、この時ばかりはいそいそと電話に出にくい銀時。新八のごちゃごちゃ言う声ももう聞こえていないようだ。

「はーい、万事屋・・・っておめーか。久しぶりだな」

電話に出た銀時が、なにやら親しげに（というか気怠げに）電話相手と話し出した。どうやら依頼の電話という訳ではないらしい。銀時は二言三言電話の相手としゃべると、はあくつと重い息を吐いてがちやりと受話器を置いた。そうして机の横に立てかけてあった木刀（柄の部分に『洞爺湖』と掘られている）をとり、腰に差す。

「おう、お前ら出かけるぞ」

「出かけるってどこへですか？」

新八が眉をひそめた。

「アレだよ・・・吉原」

銀時はぽりぽりと頬をかいてやる気のなさそうに答えた。

「じゃあ今の電話、日輪さんだったんですね」

「やったネ！日輪ちゃんにご飯一杯食べさせてもらうヨ！」

吉原と聞いてとたんに二人、特に神楽はさっきまで空腹に項垂れていたにもかかわらず大いに喜んで躍り上がった。

地下都市『吉原桃源郷』。日輪とは、その吉原という場所に住まう者たちの中心とも言える人物だ。ひよんな事から、万事屋一行はこの吉原と言う場所と関わる事となったのだが、その説明は面倒なのでコミックス（25、6巻他）などを読んでもらいたい。

「あ、タッパとか持って行かなきゃ」

万事屋の事務所兼居間から出て、玄関に行く前に台所へと消える新八。神楽がいつもの番傘を片手にズバリと一言。

「貧乏性だな駄眼鏡」

「何だとおおおお!?」

一気にぎやかになった二人の姿を見ながら、銀時はそつとため息をついた。騒がしいけれど暖かなこのいつもの情景がほほえましい。

しかし、吉原、ねえ・・・

銀時は電話の向こうの日輪の言葉を思い出していた。

「銀さん、お久しぶり。元気だった?」

「まあ、ぼちぼちだ」

「今、お暇ならちょっと遊びに来てくれない?」

「いや、ヒマっちゃあヒマだが、なーんかおめーの言い方引っかかんだけど」

「本当?じゃあ待ってるから、絶対来てね?」

「おい、スルーかよ」

「ご飯たくさん炊いておくから、ね？」

「日輪さん、あんた何でウチの食卓状況知ってんの？ エスパーか？ エスパーですかコノヤロー」

「じゃあ、また後でね？ 月詠も会いたがってるから」

「・・・」

月詠と聞いて思わず黙ってしまった銀時。

「じゃあね」

ガチャ

ツーン、ツーン、

「あ、おい・・・！」

日輪にしては少々らしくなかったとも思う。何か面倒な用がある事

は明白だ。

だが急いでいる態ではあるものの、緊急事態という訳でもなさそうだった。

吉原には、月詠が率いる自警団『百華』だってある。まあ、頭が働きすぎるという問題点もあるが、多少の事なら自力で解決できる程の実力はあるはずなのだ。

銀時たちを呼ぶという事は、百華に何かあったのだろうか。

「厄介な事にならなきゃいいけどなァ」

銀時はがしがしと銀色の頭をかいて、新八と神楽の後に続いて万事屋を出た。

こういう予感に限って、当たるんだ。

第一訓 空腹は気になり出したら止まらない（後書き）

はじめまして、龍羽と申します。タツバと読みます。

銀魂とるろ剣の時代設定の近さに悶々としていたらこんなものができました。

銀時がるろ剣世界に行くものはいくつか拝見させてもらったのですが、逆は見かけないなと思い、探してみましたが見つけれず、なら自分で書いてしまえと思った次第です。

誤字脱字や稚拙な文章等お見苦しい点があるやも知れませんが、生暖かく見逃してやって下さい。

それでは、いつまで続くか皆目見当もつきませんが、どうぞ宜しく
お願い致します。

第二訓 流れても浪人（前書き）

前回のあらすじ..

いつものようにグダグダと日常を過ごしていた銀時たち。

そこに日輪から電話がかかって来た。

久しぶりの招待を受けて万事屋の三人は嬉々として吉原に向かうのだった。

第二訓 流れても浪人

2, 流れても浪人

「日輪アゝ。来たぜー」

吉原の通りの一角にある、茶屋『ひのや』。その店先で、一行はこの店の主人でもある日輪を呼んだ。

「日輪チャーン。ゴハン食べに来たヨー！」

神楽は差していた日傘を閉じ、屋根の下に入った。銀時と新八の二人も続く。

「日輪ア???? 晴太???? …… ったく。人を呼んどいて…… おーい、つく?????」

「はーい、今行くでござるよ???? …… おろ?」

奥への出入り口に掛かった暖簾をくぐり、ひのやの店先に顔を出したのは、赤い長髪をゆるりと後ろでひとつにまとめた短身痩躯の男だった。赤みがかった竜胆色の着流しに白い袴。左の頬には十字の刀傷がある。女ばかりの吉原では珍しい。

「おにーさん、見かけねーツラだな。何？日輪のコレ？」

銀時がピンと小指を立てた。

「何故そう言う話になるのかわからぬが、違うでござる」

「ってことは、まさか？？？つく・・・いやいやそんな。違うよね？月詠のコレとか言わないよね？」

いやいやと首を振り、もう一度小指を立てる銀時。

「それも違うでござる」

「そうだよな。だいたいあんな殺風景な奴・・・いや、ツラはけっこう良いからまさか・・・いやいやいや」

「ちよっと？聞いてるでござるか？」

一向に会話が噛み合わない銀時に、青年（？）（だって神楽より少し大きいくらいの身長しかない）は対応に困った。こんな人種とは今まで対応したことが無い。

「ちよっと銀さん、落ちついて下さい。この人困ってるじゃないですか」

「でも、可能性が無いワケじゃないアル。銀ちゃんよりもこの人の方がしっかりしてそうネ」

「神楽ちゃん・・・」

「いやだー！それ以上言うなー！！ちくしょー！」

新八のフォローも神楽の毒舌に一刀両断されて終わる。いよいよもって銀時が騒ぎだした。

「そんな訳なからう」

凜とした声が後ろから聞こえてきた。

振り返ればそこには亜麻色の髪の女性が立っていた。顔に傷こそあるものの、目を見張る美人の女性だ。黒地に紅葉の紋様が入り、右袖のない着物。煙管から紫煙を燻らせるさまが画になっていて艶かしい。

「ツッキー！」

神楽の声に、ぐると銀時が振り返り、入り口に立った女性に縋りついた。

「月詠？！月詠さん！ねえウソだよな？ウソだと言っ？？？？？？はぶあ！？」

「落ちつけ、銀時」

何かを投げた後のような格好で月詠と呼ばれた女性が言った。倒れた銀時の額には、綺麗にクナイが決まっている。

「月詠殿、お知り合いでござるか？」

青年は銀時と月詠を交互に見ながらおろおろと言った。

「うむ、今朝話した坂田銀時という奴じゃ。そっちのチャイナ服の女子が神楽、眼鏡が新八じゃ。怪しい者ではありんせん」

「そう言いながら思い切り容赦ないのでござるな・・・」

すっかりあつけにとられているようだ。まあ普通の人こんな光景お目にかかれないどころではないので当然ではあるが、生憎万事屋一行にとっては非日常というわけではない。

「大丈夫です。銀さんはこれくらいじゃ死にません」

「そうネ。銀ちゃんは不死身ヨ」

「おめーら、人をなんだと思ってやがる・・・」

けろりと言い放つ二人。悪態をつきながら平然と起き上がる銀時。

常人では考えられないが、本当に大丈夫そうだ。

「立ち話もなんじゃ。あがりんせ」

月詠がひのやの奥の暖簾に手をかけて言った。

「奥で日輪が待っておるはずじゃ」

「久しぶりだね、銀さん。元気だったかい？」

月詠に通された座敷部屋では、待ち構えていたように絶世の美女が座っていた。彼女が吉原の中心人物、日輪だ。

「まーな。そっちも元気そうで何よりだ」

銀時たちは日輪の向かい側に座る。次いで月詠が日輪の隣に、赤髪の青年がさらにその隣に座る。

「日輪ちゃん、晴太は？」

きよろきよろしながら神楽が今ここにいない日輪の息子、晴太の名前を呼んだ。

「生憎今はバイトの時間でのう。何、今部下が呼びに行っておるはずじゃ」

その問いには月詠が答える。それを聞いて神楽が残念そうな顔をした。

「で、この人誰？ 一体何なの？」

一通りの会話が済んだ所で、銀時が入り口付近に座った赤い髪の青年の方を顎でしゃくった。死んだ魚のような目が少々不機嫌そうに見えるのは気のせいではないかもしれない。

青年は、軽く肩をすくめ、銀時たちに向き直った。

「あい失礼した。拙者の名は剣心？？？？？流浪人の、緋村剣心でござる」

かすかな微笑みをのせた声が、やわらかく空気を震わせた。

紅と白

有り得ぬ二色の出逢いから

交えぬはずのふたつの路が廻り出す

くるくる

くるくる

躍るは白の戦舞台

舞い立つ紅と翻そう

返す刃の一閃に

咲かせてみせるは修羅の華

銀魂剣客浪漫譚

第二訓 流れても浪人（後書き）

剣心出てきました。

るろ剣はアニメしか見ていないので、原作と若干どころでなく違っていそうですが、そこは生暖かくスルーしてやって下さい。

二話あわせてアバンタイトルの部分が修了したことになるのでしょうか。

予定では剣心以外のるろ剣キャラもちゃんと出ます。ただ舞台が銀魂なだけにしばらく剣さんしか出ませんすみません・・・

こんな感じで銀魂中心みたいな感じで進んでいきますが、最後までお付き合いいただけると幸いです。

第三訓 頼み事はひとつずつ（前書き）

ひのやを訪れた銀時たち。

出迎えたのは、見慣れぬ赤い髪の青年だった。

その名は？？？？？ 緋村剣心。

かくして、奇想天外な物語は始まった。

第三訓 頼み事はひとつずつ

3、 頼み事はひとつずつ

「るろうに？ってことはおたく攘夷浪士かなんかか？何で日輪んとこに世話んなってるんだよ」

「う、うむ。拙者確かに維新に関わったことはあるのでござるが・・」

自己紹介をした赤い髪の男？？？？剣心は何故か言いにくそうに言いよどんだ。銀時たちが首を傾げる。

「その事について銀時。少し話がある」

そう言って月詠は日輪を見、頷きあった。それを受けて今度は日輪が話し始める。

「実は最近、吉原で行方不明の失踪者や身元不明の浮浪者が後を絶たなくてね。百華も方々手は尽くしてるんだけど、さっぱりわからない状況なのさ」

「ふーん、さしずめお前もそのひとりってか？」

気怠そうに剣心を見やる銀時。剣心は困ったように微笑んだ。

「お使いがてら散歩していたら、いつの間にやらこの街の裏路地に迷い込んでしまったようでごさる」

「まあ、この人がいたおかげで、遊女が怪我させられずにすんだんだけだね」

「へえー・・・ふらっと歩いて地下にまで来たってか。器用なこつた」

「スゴい方向音痴アル」

日輪の言葉に銀時と神楽が鋭く毒を吐いた。

「ちょっと二人とも。そのおかげで助かった人もいるんですから、そんな事言うのはよして下さいよ」

何とかフォローに回る新八だが、効果の方は如何せん疑わしい。

「た、偶々でごさるよ」

「んで？俺たちをここに呼んだわけは？」

「ええ。実は、銀さんにこの人を預かってもらおうと思って」

「この人って、緋村さんをですか？」

新八が目を瞬いた。

「聞けば、この町は初めてで帰り路が判らないらしいじゃない。私はこんなんだし、月詠は百華の事で手一杯なの。銀さんなら顔が広いし、いざとなったら護衛もしてあげられるし、丁度良いかなって」

こんな、と言ったのは、日輪がある事情で足が不自由な為だった。何故こうなったのかはコミックス以下略。

銀時が深くため息をつき、銀髪をがしりと乱暴に搔く。

「まったく、相変わらず人使い荒いよね、日輪さん。ホンッとぐいぐい押してくるよね？」

「お願い？ 吉原の救世主様あゝ」

ぱん、と両の手を合わせ、甘えるような声で懇願する態度をとる日輪。少し態とらしいところがあるのは気のせいではあるまい。

「そんな下から目線で言っても駄目だからね？ 銀さんもう騙されないからね？」

一度、地雷亜の事件の時に見せられた態度なだけに、露骨に嫌そうな態度を取る銀時だったが。

「銀時・・・」

縫るように潤んだ瞳。そっと触れてくる白い手。

「~~~~ツ・・・わかった！わかったよ！！引き受ければ良いんだろ！？」

そんな月詠の面と向かって断る事はできなかったようだ。

「さすが銀さん！そう言うと思ったわ」

楽しそうににっこり微笑む日輪。

「ゼツテー確信犯だよコンチクショー」

銀時は悪態をつくしかできなかった。

「すまないでござる、銀時殿。拙者、厄介になっている間は、何でもする故」

「当たり前だ。取りあえず仕事が出来たときはお前も強制参加だからな。こき使ってやる」

「承知した」

ビシッと上から口調で言い渡す銀時。

剣心としても、世話になる以上できる事はする義務のつもりという言葉だったのだが。

「いや、緋村さん。そんな真面目に言う事聞かなくて大丈夫ですよ。銀さんは今ちょっと機嫌が悪いだけですから。客人にそんな事させません」

「まんまと手玉に取られて憂さ晴らししてるだけアル。大人げないだけネ」

新八と神楽がびしゃりと言い放った。

ぴきぴきと銀時の顔に青筋が立つ。

「かあちゃん、月詠姐??！　ただいま??！」

不意に、店の方から聞こえて来た元気な少年の声。程なくして、縁側から部屋に入る障子を開けてその少年は姿を現した。

「あら晴太。おかえり」

日輪が、入って来た少年に優しく微笑みを向ける。

「銀さーん！来てくれたんだって!?久しぶり！」

「よう晴太、元気にしてたかア？」

入って来た少年、晴太は、銀時に飛びついた。晴太を受け止めた銀時は、彼の茶色気のある鶯色の髪をくしゃりと撫でる。

「うん！銀さんも神楽さんも新八さんも元気そうで何よりだよ！今日はゆっくりしていけるんだろ！？」

「まあな」

「そうだ！日輪ちゃん！私日輪ちゃんのゴハンが食べたいアル！」

思い出したように神楽が日輪の方を向いて言った。クスクスと笑い声をたてる日輪。お見通し、という顔だ。

「そう言うと思って、ご飯いっぱい炊いたわ。たくさん食べてね」

「おい、あんま食うんじゃねーぞ。腹八分目にしとけよ」

神楽は可憐な少女という外見に反して、放っておいたら延々と食べ続けているのである。好きなだけ食わせたら、この家の食料が無くなりかねない。

「おめーもあんま飲むんじゃねーぞ。テンパ」

「うっせーこの胃拡張娘！」

「頭領。例の件でちょっと」

銀時と神楽の押収の影で、晴太を連れて来たらしい百華の女性がこそりと月詠に話しかけた。

「わかった、すぐ行く。そう伝えなんし」

頷き、立ち上がる月詠。百華の女性は先に姿を消した。日輪の顔が、心配そうに月詠を見上げる。銀時と神楽の押収もぴたりと止んだ。

「また行方不明？」

「いや、それとはまた別の件じゃ」

ふうーっつと紫煙を吐き出して、月詠が言った。

「おいおい、まだ何かあんのか？まさかこの前の紅蜘蛛党の残党、とか言うんじゃないだろうな」

がしがしと頭を掻く銀時。

「いや、天人じゃ」

「天人？　????？　春雨か？」

ぴくり、と、銀時たちの表情に僅かながらの緊張が走る。

それもその筈。名目上、今この吉原を統べているのは春雨の第七師団団長、神威？　????？　神楽の実の兄だ。春雨と吉原のふたつがそろって、彼が出て来ないわけが無い。

「いや、春雨にしてはやり方が雑のようじゃ。おそらくは別の組織」

それを聞いて、神楽の緊張の糸が一気に緩まったのを一番傍にいた銀時は感じとった。

それはそうだろう。相手は血の繋がった兄弟だ。肉親が何かしでかそうと言うのなら、それを止めなければと思うのは至極当然なことだと思う。

実際のところは銀時に知る由もないが・・・

「判っている事はそやつらが、今は潰れてしまった元遊郭の廃屋を利用し、根城としておるらしいという事」

月詠が続ける。

「鳳仙の脅威が去ったとは言え、相変わらずここは上の常識も通じぬ治外法権の地。その特性を利用して、そやつらが何か好からぬ動きを見せておるらしいのは確かじゃ。正体までは生憎と掴めておらんのだが、吉原に害をなそうというのなら放ってはおけん。いずれ部下たちを率いて叩き潰すつもりじゃ」

「おい、まさかお前・・・」

彼女の発言に、銀時が眉をしかめた。吉原絡みになると、どうもこの月詠という女性は無茶をする。そう思って声をかけたのだが、当の月詠はクスリと微笑むだけで。

「心配せずとも、無防備にずかずかと敵の懷に突っ込む程わっちは愚かではありせん。じっくりと策は練る。今日のところはぬしらもゆっくりして行くが良いわ?????どうせ、この後も見回りに出るつもりじゃったしのう」

「全く、相変わらぬ奴だよ。オメーは」

あきれたように銀時は息を吐いた。本当に何があっても変わらない女だ。

「何か判ったら連絡はする」

障子戸の脇に立ち、銀時たちに背を向ける格好で月詠が言った。

「おう。てめーも無理すんじゃねーぞ」

銀時は月詠の方は見ずに、その背中に声をかけた。

「それじゃあ、飯の支度でもしようかね。緋村さん、手伝ってくれ」

「わかった」

月詠が席を立った後、日輪が切り出した。晴太が隅にあった車椅子を押して来る。剣心が介助して日輪が車椅子に乗り、一同は移動を始めた。一拍遅れて銀時もそれに続く。

本当に

厄介な事になってるみてーじゃねーか

晴太に袖を引かれ、神楽たちとともに移動する剣心の方を見、銀時はもう何度目かも判らないため息をつくのだった。

第三訓 頼み事はひとつずつ（後書き）

おまけ…

銀時たちが帰った後の太陽と月の会話

「日輪、アレで良かったのか？」

「ばっちりよ。ありがとう、月詠。あんたのおかげで銀さんの了解が得られたよ」

「何故わっちも頼み事を言う必要があったんじゃ？別にわっちがあの様に言わずとも、銀時なら協力してくれると思うが」

「あら、わかってないわね。男は好きな娘からの頼み事は断れないものよ。現に銀さんったら、あんたが頼んだから引き受けたようなもんなんだから。気付いてなかった？」

「そうなのか？」

「本当、変なところで鈍いのねえ」

~~~~~

剣心の扱いが微妙すぎる・・・

精進。

#### 第四訓 誰にでも取り柄はあるモンだ（前書き）

吉原では、謎の失踪事件や身元不明の浮浪者の出沒に頭を抱えていた。

さらに正体不明の天人集団もいるらしい。

そんなこんなで手一杯らしい月詠たちに代わって、ひのやにいた流浪人の剣心を引き取る事になった銀時たちは・・・

#### 第四訓 誰にでも取り柄はあるモンだ

4, 誰にだって取り柄はあるもんだ

「『万事屋銀ちゃん』・・・?」

自宅だという場所に案内され、言われるままに顔を上げた先にあった看板を、剣心は読み上げた。何の変哲も無い、かぶき町のとある一軒の二階建ての建物。通りに面した建物の2階に、その大きな看板は掛かっていた。

「まあ要するに何でも屋ってことだ」

「何でも屋っていうか、ほとんどなんにもやってない屋アル。プー太郎屋ネ」

「なんにもやってないのでござるか!?!」

銀時の説明を補足するように言われた言葉に、目をむいた。ちなみに新八は、すでに自宅に帰ってしまったてここにはいない。貴重なツコミ要因がないのはイタい。

「取りあえず上がれや」

そう言って、建物の側面に後から取り付けられたような階段に足を向ける。カン、カンと金属音を響かせ、神楽が一番最初に入り口の引き戸を開いた。ガラガラガラ、と小気味良い音がする。

「ただいまヨ～～、定春！」

ワン、ワン！

留守番していたのであろう相手の名を呼んだらしい神楽の声に応えるように、こちらでも元気な犬の鳴き声が聞こえてきた。一番奥の左の部屋にいるらしく、玄関からではまだ姿が見えない。

「ほう、犬を飼っているでござるか」

少女と犬という微笑ましい構図に、心温まる想いがした。

「おたく、動物は平気なクチ？」

「まあ」

銀時がブーツを脱いで上がった横で、剣心も草履を脱いで上がった。

「なら良いけどよ。戯れついて来られたら取りあえず逃げろよ？アレを何とかできるのは、神楽だけだからな」

廊下の奥にある引き戸をあけ、万事屋の居間に入る。神楽と件の定



春という犬はさらに奥の部屋にいるらしい。

「厄介な性格の犬なのでござるか？」

やんわりとはあるが、戯れついてくる動物から逃げろと言う銀時を疑問に思い、剣心が首をかしげた。

「いや、性格自体はそんなんでもねーんだが、サイズがな・・・」

「？」

大型犬、という事だろうか。確かに犬でも、後ろ足だけで立てば人の身長と変わらないくらいにはなる。

まさか、自分の外見から言っているのでは・・・

確かに剣心は小柄で痩せてはいるが、『多少は』鍛えてもいる。それくらいでどうにかなるとは思えない。

「剣ちゃん！」

もやもやと考えているところに、神楽の明るい声が掛かる。剣心は顔を上げ、飛び込んで来た予想外の光景に固まった。

神楽はその華奢な両肩に、何やら白くて大きな物体を担いでいた。

神楽はおろか、人ひとり、いや、大の大人が複数人は乗れるかという程大きな生き物。そう、生き物だった。

「紹介するネ！定春アル！」

「おろお!?」

どこにそんな力があるのだろう。彼女は担いでいた白い生き物??? ???どうやらそれが定春というようだ???を勢いよく宙に投げ出した。それはもちろん重力に逆らわず床に落ちるわけで。

ドッシーーン!!

見た目に変わらず、大きな音を立てて着地する定春。かろうじてそれを避けた剣心だったが、開いた口が塞がらない。

「ぎ、銀時殿！これは一体・・・」

剣心の認識にある大型犬の予想を遥かに上回って、この定春という生き物は大きかった。サイズだけなら熊とも言えよう。それを軽々と持ち上げて見せた神楽の怪力にも驚いたが、常識を逸した定春にも驚きを隠せない。

「だから、定春」

銀時が大真面目な顔で言い切った。

「でかすぎるでござる！ 本当に犬でござるか！？」

「犬だよ？ これは。純然たる」

そう言って銀時が定春に手をのばした。定春が銀時を視界に捉える。

「ーーーーーなア？ 定は」

がぷ

「アレ？」

銀時の手が定春に届く前に、定春は銀時の頭が口の中に入っていた。口の中から銀時の声がかくぐもって聞こえてきた。

「しばらく押し入れン中に入ってた奴だから、ちよつと酸っぱい臭いとかするかもしれないーけど、まあ気にしねーでくれよ？」

和室の奥にある押し入れから、予備の布団を引っ張りだしつつ、銀時が言った。

「いや、何から何まで、礼を言いたいのは拙者の方でござるよ」

「そういや、ファブ●ーズがあつたっけなあ。ちよつくら探してくつから、おめーはそいつ敷いちまえ」

「かたじけない」

思い出したように席を立った銀時の背中に、剣心が礼を言う。が、ふと、銀時がその足を止めた。何か言うところがあるのか、しかし言いにくそうに頭を掻く。

「日輪たちが言いたかったのはアレだろ？ 要はおめーを監視してくれってことだろ」

「・・・気付いておったでござるか」

剣心が目を丸くする。

日輪たちはおくびにも出さなかったが、彼女等に少しでも縁のある者たちが、自分の存在を警戒していた事には、彼自身も気付いていた。故に、『護衛』と名は変えつつも、監視を任されたこの男のことを、彼も多少なりにその腹の内を探っていたのだ。

「日輪は元太夫とは言え、吉原の遊女たちの中心的な存在。月詠はその吉原を守る自警団をまとめる頭だ。そんな吉原の中核とも言える重要人物のいる所に、得体の知れねえ浪人をいつまでも置いておくわけにはいかねえだろ。いくらお前に、何の悪意がなくてもな」

銀時が、ちらりと剣心の方へ視線をよこす。

「一見ちゃんぽらんに見えて、なかなか鋭いでござるな」

死んだ魚のような目に、仄かに光が見えた?????

「それにアレだよ、女の家にはヤローが何日も泊まってるワケいかなーだろーが。ただれた関係が始まるよ？ アブネーだろ、色んな意味で」

・・・ような気がした。

「前言撤回するでござる」

おどけているように見せて、それでいて刃の如く鋭い。けれどやっぱりおどけてみせる。

この男の本質は一体どこにあるのだろう。

迷うところだ。

「まあアレだ」

銀時が再び背を向ける。

「あいつらも、自分らの町守るために必死だからよ。追い出したわけじゃねーと思うから、遊びに行きたきゃ言ってくれりゃあ、神楽

も新八も喜んで案内してくれると思うし、日輪も晴太も笑って迎えに出てきてくれるだろうぜ

?????だから、あんま気にすんじゃねーよ」

そう言って彼は完全に和室から出て行った。

「つかみ所の無い御仁でござるな」

こっそりと微笑む。

どうやら、ここでもしばらく楽しく過ごす事ができそうだ。





#### **第四訓 誰にでも取り柄はあるモンだ（後書き）**

今回は剣心視点風味で。

文章に難あり。やっぱり国語は苦手らしい。

## 第五訓 人の名前はちゃんと確認してから呼べ（前書き）

剣心を万事屋に招き入れた銀時たち。

・・・読んでる人、この前回のあらすじって必要かな・・・

## 第五訓 人の名前はちゃんと確認してから呼べ

剣心が万事屋に来て早一週間がたとうとしていた。

江戸の町は初めてだという剣心に、新八と神楽は買い物がてら町の名所巡りのようなものをするのが最近の日課になりつつある。銀時はというと、一体何をしているのだから、夜遅くに帰って来たり、朝日とともに帰って来たり、昼まで寝ていたりとは相も変わらず駄目人間のような生活を送っていた。

さすがにそればかりでは剣心に失礼だからと、新八と神楽が文字通り銀時を布団から叩き起こし、万事屋三人に定春、剣心の一行は今日も江戸見物に繰り出していた。

今日の江戸は快晴。

からりと晴れた空がとても心地良い。

そこに、やけに明るい声がかかった。

「金時！金時じゃなかか！」

いや、かかった、というより人違いだろう。

よく似た名前もあるものだとか、剣心は声の方へ振り返ってみた。

「ひっさしぶりじゃのー金時！元気にしちゃったがか！？」

だが、陽気なその男は、カラコロと下駄を鳴らしつつ、明らかにこちらへ歩いてくるようだった。銀時より背が高く、赤いコートを着た、丸いサングラスの男だった。黒髪は銀時のテンパよりももっさりしている。

「いやゝ参ったぜよ。誰に聞いても万事屋金ちゃんなんて知らん言うもんじゃき、あちこち歩き回るハメになっちよったんじゃー」

陽気を通り越して最早能天気という言葉がぴったりくる。

ピキッ、と銀時の顔に青筋が浮かんだ。

というより、その男が口を開く度に、ブチブチブチ、と何かがキレていくような音がする。

「いやゝゝ見つかってよかったぜよ。アハハハハ、アハハ？？？？？  
？へブッ」

「銀時だっつってんだろーがアアアア！テメー何度も何度もわざとらしく間違いやがって！！死んでくれよ！頼むから死んでくれ！3

00円あげるからアアアアア!!」

男の顔面に、銀時の飛び蹴りが綺麗に決まる。蹴られた男は地面と挨拶した。

だが、すぐに上体を起こした男は、再び陽気に笑い出す。

「アハハハハ。金時は恥ずかしがりやさんじゃの〜。おりよ? こんなところにべっぴんさんがおるじゃいか〜。金時の知り合いかや?」

「いや、拙者は男でござる」

剣心に気が付いた男は、今度は剣心を女と見なしたらしい。いや、確かに彼は小柄ではあるが。

「そうかえ? こりゃあ驚いたの〜。そんなこんまいナリばしちょ〜きに、ちゃんと食ってるかえ?」

「余計なお世話でござる」

銀時が蹴り飛ばした理由が何となく理解はできるかもしれない。

さすがに剣心はそこまでならないが。

「おーい、その廃刀令違反。ちょっと署までっ……て、旦那じゃないですかイ」

今度は平坦な声が聞こえてきた。

そちらを見やれば、白と黒の二色カラーの箱、もとい車から、黒服を着た男が二人出てきた。歩道側が茶色の髪をしたまだ少々幼さの残る青年、車道側が黒髪の目つきの鋭い男だ。

「沖田さん、土方さんも」

新八が二人に挨拶を交わす。続いて、渋々であるが神楽と銀時も。

「お知り合いでござるか？」

ただ、剣心だけは初対面なだけに戸惑った様子だった。新八が頷き、そして何故二人に呼び止められたのか剣心の腰の物を見て気が付いたようだ。形だけは銀時の木刀と代わらないが、その造りは全く違うもの。一部の認められた者たちのみが所持、携帯できるもの、すなわち?????

「そう言えば緋村さん刀持って来ちゃってましたもんね・・・こちらの二人は警察なんです。武装警察真選組の方たちで」

「新選組、沖田・・・?????まさか、新選組一番隊組長、沖田総司殿、か？」

やや身構えて剣心が言うと、新八に沖田さんと呼ばれた青年は、幾度か目を瞬いた。若干首をかしげたようにも見える。

「俺ア総悟でさあ。それに組長じゃなくて隊長」

「おろ？」

今度は剣心が目を瞬く。

「旦那ア、何なんですかいこいつア？ 出会い頭で人の名前ビミョーに間違える所は、旦那といい勝負でさア。土方死ね」

「テメ、なに人をさりげなく罵ってんだコノヤロオオオオオ！！」

沖田の毒舌に土方が絶叫した。

「土方、歳三殿？」

二人のやりとりを見ていた剣心は、今度は土方の名を戸惑いがちに口にする。

「十四郎だ！ テメーは本当にビミョーな間違い方しやがってしばらくぞコラ！」

「おろお！？」

沖田の言動にイライラしていた土方は、沖田に怒鳴ったそのままの勢いで剣心に喰ってかかった。初対面の剣心にでも容赦がない。

「おいおい、善良な一般市民に向かってそんな物騒な事言ってるじゃねーよ。この税金泥棒どもが」

「オメーが言うで一層胡散くせーんだよ！毎度毎度、死んだ魚のような目エしやがって！いつ煌めくんだテメーの目は！ああ！？」

銀時にも一通り怒鳴った後、土方は一度ふーっとため息をついた。

イライラとポケットをあさり、煙草をくわえるとマヨネーズ形のライターで火をつける。

「まったく、まあいい。おい、お前。その廃刀令違反！」

「おろ？」

「言い訳は屯所でたっぷり聞いてやるから、ひとまず乗れ」

「い、いや。拙者のこれは人を斬れる代物ではない故」

「何言ってやがるいかにも使い古してそうな見た目させて。ちょっと見せやがれ」

土方は剣心の腰に納まった剣の持ち手を握り、抜いた。

「お前さんこりゃあ・・・」

まわりにいた者たち、剣心以外の男衆が、ほう、と息を呑んだ音が



した。

一点の曇りも無い、よく手入れの行き届いた綺麗な刀。だが、鞘から姿を現したその刀身は、刃と峰が逆に付いていた。

「剣ちゃん。この刀、出来損ないネ。これじゃ何にも斬れないヨ」

一同の間からひよつこりとその刀を覗き込んだ神楽が、ことりと首を傾げる。

「神楽ちゃん。これは逆刃刀って言ってね、最初から刃と棟が逆になっている刀なんだ」

新八が説明する。

「へえ、随分珍しいもん持ってんじゃねーか」

銀時も感心したように言った。

「言ったでござろう。人を斬れる代物ではござらんと」

土方から刀を受け取った剣心は、キン、と刀身を鞘に戻した。

「確かに、柄にはべつとりと血がついたような形跡があるわりに、刀身にはそれが無え」

「ですねィ。一度でも人を斬ったら、こうはなりやせんし。謝れよ

土方

「おめーもだ！」

この二人は、良くも悪くも常時仲が悪いようだ。

「じゃき、品はえらいええもんじゃ。技もんかや？」

顎に手を当てて、坂本が言った。

「とある刀工がうった最後の一振りだそうでござる」

「ま、世の中物騒だしなア。こんくれーなら見逃してやってもいいんじゃないの？」

銀時が新選組の二人へ視線を送る。土方はフウつと煙草の煙を吐く。

「しゃあねーな。俺としちゃあ、オメーの木刀も取り上げてーところだしな」

過去幾度か銀時が戦う姿を目にして来たが、どれも、真剣ならば軽々と命を奪っていたような太刀筋ばかりだった。銀時が使う得物が木刀だったからこそ、対峙した者たちは全て生きていると言っている。

最も、骨折などは避けられていない。打ち込む場所を違えば、撲殺も可能だろう。

「旦那だと、木刀でも凶器になり得るから怖いでさア」

「んだよ。もう助けてやんねーぞ」

「テメーに助けられた覚えはねえよ！」

## 第五訓 人の名前はちゃんと確認してから呼べ（後書き）

ちょっと長くなってしまったので一度区切ります。

人数多くてキャラが回りきりません。

というか土佐弁難し・・・！

念の為ですが、

歴史のテストなどで、小説内で訂正された名前を書いてはいけません。

訂正前（剣心が呼んでいた方）が本物です。

## 第六訓 大切なものほど構いたい（前書き）

江戸の町を歩いていた万事屋一行は、陽気な男と遭遇する。

立ち話しているところに真選組の土方と沖田も加わってさらに賑やかになり・・・

## 第六訓 大切なものほど構いたい

「ま、ここで会えたのは丁度よかった。旦那、ひとつ依頼があるんですがね」

「依頼？ テメーらから？ 何かやな予感しかしねーんだけど」

銀時が明らかに嫌そうに顔をしかめた。

「大丈夫でさア。ちよっくら俺らに稽古つけてくれないかと思いやしてね。どうせヒマでしょ？」

「どうせって何だよ」

「受けましようよ。どうせヒマなんだし」

「そうヨ。そんで依頼金たっぷりふんだくってやるネ！」

新八、それに神楽だ。

「それに今は仕事選んでる場合じゃないです。本当、切羽詰まってるんですから。家賃もたまってる事ですし」

「あんなもん、常に溜まってるだろうが」

「いや、開き直らないでください。今は緋村さんだっているんですからね。いつもと同じだったら失礼じゃないですか」

「いや、拙者はかまわないでござるよ」

「駄目ですよ、剣さん。そんな事言ったら、銀さん調子に乗っちゃいますからね」

「万年金欠の駄目野郎の言う事なんか聞く必要無いネ」

この二人は、果たして銀時を本当に慕っているのだろうか。時々疑いたくなる。

「で？引き受けんのか。どうなんだ」

すぱっと煙を吐きつつ、土方が言った。

「・・・わーったよ。金がねーのは本当だしなァ」

渋々ではあるが、銀時が了承する。

「本当ですかイ、旦那」

沖田の顔が、この時ばかりはほころんだ。

「さすが銀ちゃんアル。ありがたく思うヨロシ」

「ちょっと神楽ちゃん。仕事受ける身なんだから、そんな事言っちゃダメだよ」

縁があって親しくはあるが、今は依頼人である。

「ま、どのみちテメーからの手ほどきなんざごめんだがな、チャイナ」

「何だこのドS野郎！オメーこそそれが人にものを頼む態度アルか！？あんまなめてつと痛い目見んぞコノヤロー！」

「へ、上等だ。今日こそ決着つけてやらア！」

言い合いの後、神楽は傘を、沖田は刀を手に暴れだした。

突然の展開に剣心はおろおろとするばかりだったが、そこは二人の言い合いを見慣れた新八が間に入る。

「ちょっと、二人とも！こんな往来でそんなもの振り回したら危ないよー。」



すると二人はぴたりと止まって、ぐるりと新八の方を向き、声を合  
わせた。

「うるせー駄眼鏡!」

「何でそこだけ息ぴったりなんだよおおおお!!」

新八のツツコミが天を突いた。

銀時が大仰にため息をつく。

「言っとくけど、銀さんの指導は厳しいよ? 亀仙人も裸足で逃げ出  
すよ? いいの?」

面倒臭さが全面的に滲みだしている。

「旦那のやりたいようにやってくだせえ。あ、間違えた。旦那の殺  
りたいように土方コノヤローを殺っちゃってくだせえ」

「総悟オオオオオ!!」

この沖田という人物、甘い顔立ちとは裏腹に、どこまでも黒いらし

い。

「じゃあ、また明日会いやしよう、旦那。そっちの二人も是非」

そう言って一足先にパトカーに乗り込む沖田。土方も、ため息をつきつつじゃあなと軽く挨拶して運転席側から乗りこむ。

ほどなくして、パトカーは再び発進した。

「・・・銀時が人を教えるゆうなんちや何年ぶりかや？」

パトカーが去って行った後で、坂本が言った。珍しく名前を間違えていない。

「うっせーよ。たまにはいいだろ。それにあいつらには、もうちょっと強くなってもらわねーとな。こっちは不安極まりねーんだよ」

がしがしと頭を掻く銀時の言葉の意味を正しく理解して、坂本が苦笑した。

要は心配なのだろう。

彼ら真選組は、銀時や自分のように、戦場に出ていたわけではない。

だが、決して弱くはない。むしろ、彼らはそれなりに強い方。自分たちの強さの方が異常なのだ。

「あんまり強くしゅーと、ヅラが苦勞するぜよ」

「ちょっとやそつとであいつが捕まるかよ」

「その通りじゃ。アハハハハ」

もう一人の戦友を想った言葉は、信頼であえなく一蹴されてしまった。

「今の二人の会話に出てきた、ヅラ殿とは・・・」

二人の会話を後ろで聞いていた剣心は、誰にともなく声をこぼした。なぜか古い知人の顔が、頭をよぎる。

「ああ、桂さんですね。あの二人の古い知り合いみたいです。まあ、あんまり詳しいことは知らないんですけど」

新八が苦笑まじりに説明する。ある意味予想内、だが、ある意味予想外の名前が出た事に、剣心は目を丸くした。

「あ、念の為言っておきますけど、桂さんと銀さんたちの関係はさっきの人たちには内緒ですよ。良い人なんですけど、一応追われてる身なんです」

そうか、と納得でかえした。

どこへ来ても、維新志士と幕府側の人間は対立するらしい。

## 第六訓 大切なものほど構いたい（後書き）

おまけ

まだ突っ込んでなかった坂本さん

「そう言えば、そちらの御仁は・・・」

「ん？ああ、こいつは快援隊の社長の坂本ってんだ」

「海援隊の坂本・・・まさか、坂本龍馬殿！？」

「あ？違う違う。わしやあ龍馬じやのーて辰馬じやき」

「おろ？」

「全く人の名前ば間違えるなんて本当そそっかしい奴ぜよ。いかな  
のう人の名前ばそげに間違っちゃあ。のう、金時？」

「オメーが言うなや！！」

~~~~~

誰か土佐弁を教えてください。

というか郭言葉もままならねーよ。

第七訓 似たような名前もあったモンだ（前書き）

町でばったり会った真選組から稽古をつけてくれと依頼された銀時たち。

居合わせた快援隊社長、坂本辰馬も加わって、翌日屯所に向かう事になった。

第七訓 似たような名前もあったモンだ

翌日。

万事屋の三人と、坂本、剣心の一行は、広々とした屋敷の門前に来ていた。

「真選組・・・？」

剣心が表札に書かれた特別警察という言葉に続く文字を読み上げた。

「そ、昨日会った税金泥棒共の根城だ」

「いや、銀さん、ちょっとそれ言い過ぎです」

「でも事実アル」

銀時、新八、神楽の順だ。

「ふむ、同じ『しんせんぐみ』でも、真＞まことく選んだ組と書くのでござるか・・・」

ほとんど人に聞こえる事のないような、こそりとした音量で剣心が呟いた。一番傍にいた新八は、かろうじてかすかな音としてそれを捉え、なんだろうと首をかしげる。

「何か言いました、緋村さん？」

「いや別に・・・」

何故か言いよどむ剣心に新八は首を傾げるが、朗らかな声がかかってそれを綺麗に忘れてしまった。

「よう、万事屋！来てくれたか？・・・？して、そちらの二人は？」

顎髭のある人の良さそうな黒服の男だ。銀時たちとともにいる坂本と剣心の二人を見つけて尋ねてきた。

「こっちの馬鹿は俺の知り合いの坂本辰馬。こっちは？・・・？」

「緋村剣心でござる。故あって、銀時殿のところに厄介になっているでござるよ。ええと？・・・？」

「ああ、すまん。俺は真選組の局長をやってる、近藤勲だ」

黒服の男が答えた。

「近藤、勲殿でござるか」

「ほお〜。おんしが真選組のゴリラ勲さんかや〜」

自己紹介されたばかりだというのに、早速名前を間違える坂本。

「いや、近藤って言ったよね」

近藤が訂正するが、効果の程は定かではない。

「おりようちゃんから噂は聞いちゅうぜよ。何でも、何度地に落と
しめても蘇る不死身のゴリラじゃとか」

「いや、近藤ですけど。てゆか何それ！」

「つか、オメーが人の事言えんのかよ。たまにお妙んとこのキャバ
クラ前に転がってるだろーが」

おりように熱烈なエールを送る坂本が、何度かアタックに失敗して
いるところを目撃した事がある銀時。お妙については以下略。お妙
もおりようも同じ店のキャバ嬢である。

「なんじゃあ〜。おりようちゃんは恥ずかしがっちやるだけじゃき、
新一郎君のお姉さんと一緒じゃ」

「新八です。てゆか、さりげに人の姉上も話に上げないでください」

新八が半眼でツツコミを入れる。

「あ、旦那ア、そろそろ来る頃だと思ってやしたぜイ」

沖田が、木刀を片手にこちらへやって来た。昨日の隊服ではなく、簡素な着物に袴と、稽古着である。若干汗をかいているように見えるのは、既に身体を動かした後だからだろうか。

「よオ、沖田君。何だ、もう始まってんのか。気合い入ってるねえ」

「なに、軽い準備運動でさア。今日は旦那が来るってんで、皆いつもより張り切ってますぜイ」

「おい、立ち話はその辺にして、さっさと道場の方に移動しろ」

土方が建物の中から姿を現した。こちらは近藤と同じ隊服姿である。

「ハハ、トシも総悟も気が早いな。ま、今日はよろしく頼むよ、銀時」

近藤について一同はそろそろと移動を始めた。

「しかしなんでまた稽古なんか」

面倒くさいと言わんばかりに、銀時が言葉を漏らす。近藤が口を開いた。

「近頃、ある天人の凶悪集団が秘密裏に入国して来てるみたいだという情報を得てな。有事の為にここで隊士たちに活を入れ直して気を引き締めようってわけだ」

「って言うのは建前で、本当は旦那から技を盗んで打ち負かしたいんでさア。主に土方さんが」

「総悟・・・テメエ・・・！」

青筋を浮かばせる土方の隣で、近藤が朗らかに笑った。

「まあ伊東の一件で、万事屋の剣に憧れを抱いた隊士がたくさんいるのは事実だからな。奴らにも良い刺激にはなると思うんだ。ひとつ、よろしく頼むよ」

「チッ、面倒くせーな」

そう言って銀時はがしと頭を掻き、

「で？その天人集団ってのあ一体何者だよ」

ちらりと真選組の三人の方に視線を送る。その瞳の中に一瞬だけ、鈍い光が垣間見えた。

「すいやせんがそいつは機密事項でさア。いくら旦那でもそこまで
は教えられやせん」

「そーかい」

沖田の返答に、銀時の瞳からあっさりと光が消え失せる。

「良いのでござるか？」

真選組の三人から少し距離をおいたところで、剣心が声を落として
話しかけて来た。

「ああ？」

「近藤殿が言っていた天人集団、もしや月詠殿が言っておった」

「仕方ねーだろ。あいつらだって仕事なんだからよ」

銀時が肩をすくめつつ、剣心の言葉を遮る。

「商売に密事はつきものぜよ」

うんうんと同意する坂本。

「おい、何か黒い事言っただけだ。実は裏で黒い事やってたりとかしてねーよな」

「気のせい気のせい。幻聴じゃ〜。アハハハハ！」

能天気な笑う坂本。仮にも警察の前でする会話ではない。

「テメーら、そう言う会話は俺らの前でするもんじゃねーだろ」

当然、土方の口調に怒気が混ざる。

そんな銀時らのやりとりを、遠巻きに見る剣心。

「仕方ないと言うわりに、まるで諦めていないようでごさる」

日輪殿や月詠殿ら吉原の者達に色々と気を回している態のある銀時殿が、意外にあっさりと身を引いた事に剣心は驚いていた。もう少し粘って情報を引き出させるだろうと思ったのだが・・・

「剣ちゃん、どうしたアルか？」

一人離れてしまった剣心に気付いた神楽が、ことりと首をかしげた。それに何でもない笑顔で返し、

他の宛がある、のか・・？

心の中で独り言ちた。

第七訓 似たような名前もあったモンだ（後書き）

ちよつと見ない間にお気に入り登録が2ヶタになってました。

ご愛読、ありがとうございます。

今後も変わらず不定期にグダグダした感じの更新状況になるかと思われませんが、なにとぞよろしくお願い致します。

第八訓 道化と思って油断したら駄目（前書き）

翌日。

真選組の屯所を訪れた銀時たち万事屋一行と二人。

近藤、土方、沖田の三人と軽く挨拶を交わし、早速道場へ移動した。

第八訓 道化と思って油断したら駄目

「辰馬ア、テメーも手伝え」

道場にて、銀時は壁にかけてあった竹刀の一本を手にとると、ひよい、と坂本の方へ放った。

「なんじゃ、金時だけでも充分じゃいか？」

竹刀を受け取った坂本は、片方の手で竹刀の柄を握り、もう片方は竹刀の腹の部分をする。サングラス越しの目が、楽しそうに銀時を捉えていた。

「嫌だよ面倒くせー。それに」

がしがしと頭を掻きつつ坂本に近づいた銀時は、がばりと彼の肩に寄りかかった。完全に友人に絡むチンピラの図である。

「宙ばっか飛び回ってんだから、たまには身体動かしやがれ」

「アハハハハ。金時にはかなわんの〜」

一体何がおかしいやら。能天気な笑い声を上げる坂本。

それを確認して、銀時が道場の中央に出る。それに続いて、坂本が銀時と背中合わせに立った。

道場の左右に並んで座った真選組の隊士たちが、ごくりと唾を飲む。正面には近藤、土方の二人。今回は、主に銀時への依頼なので、万事屋の従業員である新八と神楽の二人も観戦に回っている。ちなみに剣心も客人扱いなので観戦組である。

「そーだなー。まずは腕を見てーから、平から十人ずつかかって来い。隊長格はその後ひとりずつだ？？？？あーく違う違う。ひとりにつき十人だからな。俺と辰馬、あわせて二十だ」

やる気のなさそうにはあるが、いきなりかかってこいと宣言する銀時に、隊士たちはどよよと動揺した。

「金時はせっかちじゃのー」

ふいふとため息をつく坂本。

「銀時だ！ちんたらやってたら日が暮れちまうだろーが。隊長まで辿り着けねーだろーが」

「剣は久しぶりじゃゆーに、金時にあわせちよったら途中でばててしまいそうじゃ」

言葉とは裏腹に、けらけらと笑い飛ばす。

「だったら全員でやるか？準備運動もかねて」

「それはそれでバテてしまいそうじゃき、遠慮するぜよ」

キツそうではあるが、決して笑みは消えない。苦笑いなのか、本当に余裕なのか。

「へ、上等だ。そいつがお望みならそのとおりにやってやるよ。おい、山崎、お前合図しろ」

土方は後者の判断を下したようだ。

「アッハッハッハ！かなわんのお〜」

隊長格の者以外の隊士たちが、ぞろぞろと立ち上がり、銀時と坂本の二人をぐりりと取り囲んだ。指名された山崎は、近藤ら観戦組とは反対側の壁際へ赴き、全体が見える位置に立つ。

隊士たちがそれぞれ手にした竹刀を構え、じりりと合図を待つ。

誰かがごくりと喉を鳴らす音。

山崎の腕がゆらりと上がる。

緊張で張りつめた空気。

不意に訪れた沈黙。

「それでは行きますよ………はじめ！」

その合図とともに、一斉に二人に斬りかかる隊士たち。

方々から上がる関の声。

振り降ろされる竹刀の群。

中央の二人の口端がにやりとあがる。

「隙だらけじゃねーか」

ぼそりと銀時。

次の瞬間………？

銀時と坂本の二人に一番近かった隊士たち約十数名が宙を舞った。

「まア、威勢だけは褒めてやるよ」

シュツ、と一振り。

「金時はまっことおっかないのお〜〜！」

坂本の陽気な笑い声。

威勢も何も削ぎ落とされる………

「オラどうした？もう終わりかテメーら。さっさと次かかって来やがれ」

挑発。

再び上がる関の声。

だが

奮戦虚しく、隊士たちは次々に倒されていく。

彼らが全て倒されるまで、小半刻とかからなかった。

「ザッとこんなもんか」

銀時は倒れた隊士たちをぐるりと見渡し、竹刀のハラでトントンと自らの肩を叩いた。

強い。

坂本の方も片がついたらしく、倒れた隊士を踏まないように銀時に歩み寄って来る。

その姿を見て、銀時はにやりと笑った。

「飛び回ってるわりにゃあ腕は落ちてないみてーだな」

「じゃき、久しぶりでバテてしもーたきに。おんしはさすがぜよ」

肩をすくめてみせる坂本。バテたと言うわりには、額にじんわりと汗が滲む程度である。

一方の銀時は、息切れはもちろん汗ひとつかいていない。

「よし、次は隊長格な。十番の原田から順に出てこいや」

「っしやああああ！万事屋覚悟しやがれ！！」

まだ控えていた隊長格の面々をぐるりと見渡し、銀時が指名した。スキンヘッドの厳つい男が威勢良く出て来る。

「じゃあわしんそこには九番隊の隊長さんから来るぜよ」

銀時が原田とやっている間に、坂本が別の一人を指名する。

書き忘れていたが、三番隊と六番隊は出張やら見回りなどで席を外しているので、色んな意味で残念ながらこの場は不在である。

「銀時殿も辰馬殿も、随分と強いのでござるな」

観戦組の面々とともに一連の出来事を見守っていた剣心が、感心したように声を漏らした。

「当たり前ネ。何たって銀ちゃんだからナ」

神楽が誇らしげに言う。

「普通剣客というものは、自らに親しんだ剣術の型というものがあるのでござるが、銀時殿はそれがまるで見られない。辰馬殿は北辰一刀流の使い手とお見うけしたが、銀時殿は何処の流派でござるか」

「さあ、銀さんは我流だって言っていましたけど」

剣心の言葉に、新八は首をかしげつつ答えた。銀時は、自分の事はあまり喋ってくれないので、詳しい事は誰にもわからないのだ。旧知の仲の面々であれば、また別の答えも持っているかもしれないが・

「我流・・・」

新八の答えを聞いて、剣心は再び銀時らの方へ視線を向ける。当の銀時は、既に原田を倒していた。

あそこまで強くなるには、並大抵の事ではない。

それにあの太刀筋・・・

「おーいその赤毛野郎」

「おろ？」

やる気の無い平坦な声がかけられ、剣心は思考を中断した。顔を上げると、目の前に沖田が立ち、彼に見下ろされる格好となっている。

「旦那とやるのも魅力的だが、俺アあんたともやりあってみてーや。ひとつやりあってくれませんかねィ」

思いがけない提案。

「いや、拙者の剣は人に教えられるようなものでは・・・」

剣心が言いよどむ。

だが、沖田は退かない。

「頼みますぜ兄さん。旦那への報酬は、はずみまさア」

「マジでか！おいやれ！緋村！！」

「ぎ、銀時殿・・・」

金が絡むや銀時が目の色を変えた。そう叫びつつ二人目を制している。

その様子にがつくりと肩を落とす剣心。乗り気ではない彼に構う事なく沖田は話を続ける。

「お願いできませんかねえ。廃刀令のご時世に、そんなモンぶら下げてるからには、相当腕は立つんでしょう？？？？？なに、あなたの剣を教えてくれってワケじゃねえ、俺アあなたの腕を見てみたいんでさあ」

その目の奥に、チラチラと灯る炎。

純粹に剣を交えてみたいという欲求が見え隠れしている。

周囲に比べ、まだ若いながらも、一端の、いや、一流の剣客としての顔が伺える。

不意に、『誰か』の姿が重なった。

「・・・拙者で良ければ」

「そう来なくっちゃ」

時空を超えて、思いがけない試合が組まれた。

第八訓 道化と思って油断したら駄目（後書き）

銀魂の原作に、三番隊の隊長が出てきていないのが残念です。

名前だけなら、コミックのおまけページに乗ってますけど。

第九訓 他人のそら似でも懐かしいと思う事くらいある（前書き）

真選組からの依頼で、隊士たちに稽古をつけることになった万屋一行。

その稽古の最中で、沖田が剣心に自分と対戦してほしいと名乗り出る。

時空を超えた試合が始まる。

第九訓 他人のそら似でも懐かしいと思う事くらいある

沖田以外の隊長格の面々が全て銀時と坂本の二人に倒され、ようやく剣心と沖田の模擬試合が回って来た。

そもそも真選組の面々は、馴染みの万事屋一行に、見知らぬ二人が付いて来ていた事にも驚いていたのだ。情報に聡い山崎のおかげで、背の高い方は快援隊の社長とわかったが、赤い髪の方は本当にわからない状態だ。

既に見知った凄腕の侍である銀時が、稽古開始の時に坂本に助力を求め、ふたりのその腕にも驚いていたが、見慣れぬ剣客が、一番隊長の沖田と剣を交えるという展開になって道場内は一層どよめいた。

真選組随一の腕の持ち主である沖田に、無名の剣客が勝てるはずが無い。だが、銀時の知り合いだというのならば、自然この二人に注目が集まる。

「兄さんはそいつでいいですよ。使い慣れた得物の方がいいでしょう。どうせそいつは人を斬れる代物じゃねえし。そのかわり、俺はこいつを使わせてもらいまさア」

竹刀を取りにいかうと立ち上がった剣心を制して、沖田が言った。
目線の先は、剣心が持つ逆刃刀。その手には、竹刀の代わりに木刀を携えている。

「かたじけない。では、お言葉に甘えて」

そう言い、かちやりと刀を携え、道場の中央に出た。なんだなんだと隊士たちが驚く中、剣心はかちりと鯉口を切り、すらりと刀身を抜いた。腹と棟が逆になった刀身が露になり、道場内にほう、と息を呑む音がする。

「ほお、逆刃刀か」

初見の近藤もまた声を漏らした。

「しかも技もんだってよ。辰馬が言うんだから本当だろ。頭はカラだが、こいつも目利きだからな」

自分のノルマを片付けて、銀時が観戦組の方にやって来た。そのまま彼はどかりと座る。

剣心の腕を見たいのは、彼とて同じだった。

吉原にふらりと現れた浪人。

はたして??????

「おい山崎イ、合図しろイ」

道場の真中に立った沖田は、平坦な声でそう言うと、構えた。

剣心もまた、構える。

「ではいきますよ?????はじめ!」

山崎が手を振り降ろすと同時に、ガチンツと剣が交わる音が響く。

ギリギリと鏝迫り合い、一度互いに退き、そして再び斬りかかる。

次第に激しくなる応酬。

大きな音とともに取られる間合い。

体格的な差か、力比べでは若干沖田の方に采配が上がるようだが、それを補う速度が剣心にはあり、拮抗した状態が続く。

隊士たちの開いた口が塞がらない。

????やはり強いな。ならば拙者も

一際がちやりと音を立てて二人が一旦離れる。

そうして剣心は、鞘を帯から抜き、刀身をかちりとしまった。

目線の先には、目の前で対峙する沖田総悟。

スッと腰を落とし、手は刀に添えて。

いつでも刀を抜けるように、構えた。

「あれ？剣ちゃん刀しまったヨ。諦めてしまったアルか？」

剣心の構え方にひとり、ぱちくりと目を瞬いた神楽。

「諦めたんじゃない、ありゃあ拔刀術だ」

土方が煙草を燻らせ、言った。

「鞘から抜き放つ速さに乗せて刀を振るう、神速の剣」

「ま、チャイナは、普段刀なんか使わないからちと馴染みが無いかもしれないな」

近藤が後続けた。神楽の得物は武装を施された番傘だ。刀なんか使わないしその必要も無い。

「へえ、拔刀術ですかイ」

沖田が剣心の構えを見て言った。その目に映るは驚き、というより、感心である。

拔刀術は確かに神速の剣と言われてはいるが、それは大抵カウンタ―を狙って放たれる技が多い。

後の先を取る、いわば護りの刀。

「??? 攻撃を待つつもりですかイ、にーさん

沖田の口端が上がる。

「おもしれエ」

「??? 乗ってやりまさア

木刀を構え、じりりとタイミングを計る。

？？？ああ、名は違えど、似ているな・・・

この緊張の中、剣心は、先程から沖田にかさなる影を思い出していた。

こう思うのはおかしいのかもしれぬが

ひどく、懐かしい？？？

ふわりと剣心の纏う空気が和らいだ。

その刹那。

動きだす沖田。

切られる鯉口。

カッと膨れ上がる剣客の気。

飛天御剣流?????!

剣心の鞘から、白銀が放たれる。

神速の一閃。

紙一重で空を斬る刃。

????初撃をかわせばこっちのモンでさア!

振り降ろされる沖田の木刀。

その『油断』を薙ぎ払う

黒の追撃？？？？！

双龍閃！！

剣心の鞘は沖田の胴を確実に捉えていった。

どきりと地に伏す沖田。

剣心の眉が微かにぴくりと上がったのを、一体何人が気付けただろう。

道場内に沈黙が訪れる。

それを最初に破ったのは、神楽だった。

「すっげーアル剣ちゃん！サドが一撃ヨ！」

非常に興奮している。

それに続くように沸き上がる喚声。

「まさか真選組随一の腕をもつ総悟を倒しちまうたあな」

土方がくわえる煙草が、チリチリと音を立てた。彼もまた、少なからず動揺しているらしい。

「すまぬ、沖田殿。つい力が入ってしまった・・・」

打たれた胸をかばいながら起き上がろうとする沖田に、剣心が手を差し出した。

「・・・にーさん、強いですねィ。一太刀目はかわせやしたが、『二太刀目』は全く見えやせんでした」

沖田は珍しく素直にその手を取る。

「そう、でござるか・・・」

剣心の表情に、何故かちらりと寂しげな色が見えた。

「へえ、やるじゃねえか」

こいつは相当場数踏んでやがらあ。

剣心と沖田の試合を見て、銀時は心の中で独り言ちた。

これならば、月詠が警戒したのも頷ける。

こいつは強い。

多分、まだ本領の一部も見せちゃいないだろう。

がしがしと片方の手で頭を掻きつつ、もう片方の手に持った竹刀で
とんとんと自らの肩を叩く。

ますます厄介事が増えていきやがる。

「んじゃ、次行くかー。こまけー指導は後にして、取りあえずお前ら、体力作りからだな」

大仰にため息でもつきたい気分だが、それはこいつで晴らすことにしよう。

「素振り100回50セットな」

銀時の八つ当たり、もとい、指導に、隊士たちの悲鳴が上がる。何人かの抗議の声もまるっと無視だ。

「相変わらず鬼じゃのー。ちっとは休ませてやるぜよ」

フイーツと坂本が肩を落としてため息だ。

「オメーは相変わらず甘え？な」

「程々にしておくぜよ、銀時」

サングラスの向こうから、坂本が銀時に視線を送った。それを見て息をつく銀時。

「・・・しゃーねえ。30セットにしてやらあ」

銀時が珍しく妥協した。

・・・相変わらず多いけれども。

それから二刻ほど。

依頼を終えた万屋一行が帰った後、翌日から朝練メニューを倍にするという土方の言葉に、隊士たちが再び悲鳴を上げたのは言うまでもない。

鬼の副長、ここにアリ、である。

第九訓 他人のそら似でも懐かしいと思う事くらいある（後書き）

おまけ…

いつまで経っても話が噛み合えない坂本さん

「そーいや辰馬。お前、仕事は？」

「ああ、今頃陸奥の奴怒っておるじゃろうのー」

「また黙って来やがったな・・・」

「まあまあ、そう言わんと、久しぶりに会うたんじゃ。用事の方も一段落した事じゃき、今日はパーッと騒ぐぜよ！のう、金時！」

「銀時だつての！ったくコノヤロー・・・おい神楽！今日は腹一杯食っていいぞ！こいつからがっぽり搾り取ってやれ！」

「マジアルか！？じゃあこの馬鹿の財布が空になるまで食っていいアルか！？」

「おお、こいつ無駄に金持ってるからな」

「アハハハハ。好きなだけ食うと良いぜよ。そっちの剣太くんも

「一緒に！」

「いや、拙者は剣太ではなくて剣心でござると昨日も……」

「こんまい事はいいきに。今夜は宴じゃー！！」

「全く聞いてないのでござるな……」

「まあ、あいつは頭カラだからな。俺も昔っから話がまともに噛み合った試しがねえ……」

「……………」

ほぼ剣心視点でお送りしました。

剣心に竹刀を持たせなかったのは、双龍閃がやりたかったから。

で、沖田に木刀を持たせたのは、さすがに逆刃刀相手に竹刀は脆い
と思ったから。

やりたい事をやってきます。

長らく開けて申し訳ありません。

多分またこんな感じで間が空くことがあるかと思われます。

まー・・・ 最初に不定期更新って書いてあるんで、今後は書かなくてもいいですよ、ね・・・？

第十訓 宴はみんなではしゃぐもの（前書き）

真選組からの依頼を終えて、一行は屯所を後にした。

坂本を先頭にして、向かった先は・・・

第十訓 宴はみんなではしゃぐもの

真選組の依頼を終えて、万事屋の一行は、歌舞伎町の歓楽街を歩いていた。

きらびやかなネオンがそこかしこ点き始める中、カラコロと下駄を鳴らしながら先頭を歩いていた坂本が不意に立ち止まる。

「ついたぜよ」

そこは、その通りの中でも一際大きく、日本独特の趣のある建物だった。

「た、辰馬殿。ここ、高級料亭と言うやつではないのでござるか！？」

剣心が狼狽した。ここ一週間の万事屋の経済状況を見ているだけに、この見るからに高級そうな旅館は畏れ多い。

「ああ、わしの知り合いがやつちゅう店じゃき。そがなこんまい心配はいらんぜよ」

坂本が太鼓判を捺した。

「さっすが宇宙を股にかける快援隊社長。やるねえ」

坂本の素性を知っているため、逆に喜んだのが万事屋一行。

「やったネ！久しぶりにゴハン食べ放題アルウウウウ！！」

キャツホオオオオ！！

とばかりにかけて行く様はこどもらしいと言えbraしい。陽気に笑いながら、坂本も中に入っていく。

それを後ろから微笑ましく見ていたのが新八。

「ハハ、神楽ちゃんたらあんなにはしゃいじゃって」

「すまねえ神楽。銀さんが不甲斐無いばかりに・・・」

目元に手を当てて項垂れる銀時。

「反省してるんならパチンコは控えて下さいよ」

「違うんだよ。いつも良いところまで行ってんだよ。なのに土壇場で勝利の女神がトonzラしちゃって」

「はいはい。馬鹿はほっというて行こう、緋村さん」

剣心の背を押して新八が門をくぐり、最後に銀時が続いていった。

通された部屋も随分広かった。部屋は襖で大きく2部屋に分けられるようになっており、正面の部屋の奥は小さな庭園に続く縁側が設けられている。

まさにVIPルームというやつである。

仲居さんたちが全ての食事を運び終わったかという頃、するりという音とともに、再び襖が開けられた。

「失礼致します。お連れの方がお見えになりました」

そう言うと女性は静々とその場を退いた。

入れ替わるように現れたその男に、坂本がひらりと手を振り朗らかに迎え入れた。

「やっと来たかやー。待ちくたびれたきー、早よ入りんせ」

「おま、ヅラ!？」

銀時はその男の登場に目を剥いた。

「ヅラじゃない、桂だ」

剣心がそっと息をのむ。

青を基調にした着物と羽織を着た長髪の男だった。その腰には刀がさげられている。

「わしが呼んだんじゃ。やっぱ宴は人数が多いにこした事はないきに」

「だからって、仮にもこいつ攘夷志士だぞ。快援隊の社長が、こんなところ見つかったらしょっぱかれるだろーが」

横目で坂本を見やる銀時。

「ふん、のろまな幕府の狗どもに遅れなどたらぬわ?????全く、話があるというから来てみれば、貴様らは相変わらずだな」

す、と背筋を伸ばし、空いた席に座る桂。

「桂、小五郎殿・・・？」

入って来た桂の姿をじっと見ていた剣心が、ぽつりとこぼした。その声を聞いて桂が眉をしかめる。

「小五郎じゃない、小太郎だ」

「おろ？」

剣心がぱちくりと目を瞬いた。

「先日から銀時のところに妙な浪人が出入りしているらしいとは聞いていたが?????銀時、何だこいつは。出会って早々人の名前を間違っておって」

さすが情報が早い。

「まあ、今はいいじゃねーか。とりあえず飲もーぜ、ヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

徳利をこれ見よがしに持ち上げて見せながら言った銀時に、いつものように名前を訂正する。

「細かい事気にするなヨ。せっかくの飯がまずくなるネ。不味すぎて喉も通らないヨ」

がばりと顔中に飯粒をつけたまま顔を上げた少女が持つのは、寿司桶である。

「いや、そう言いながら桶の山築いてるよね。全然食欲損なってないよね」

見慣れているとは言え、突っ込む側の新八も若干退き気味だ。

「この短時間でこんなに食べたのでござるか!？」

「まだまだ量の内じゃないネ。もっといけるアル」

剣心も既に何度か見ているとは言え、神楽の底知れない胃袋に目を丸くした。桂がフツと微笑む。

「さすがリーダー。健康的な食いっぷりだな」

「いや、明らかに異常だろ」

突っ込む銀時。

「やはりこどもはよく食べ、よく眠るのが一番だ。不摂生にパフェだ、いちご牛乳だと軟弱なものばかり食していると、そのうち性根が腐ってしまうぞ」

「オーイ、誰の事言っただそれ？まさか俺の事か？俺の事じゃねーだろーなコノヤロー」

銀時は自他ともに認める糖分王である。

「金時はまっこと甘い物好きじゃきの」

うんうんと同意する坂本。

「オメーはいい加減人の名前覚えやがれ！坂本^{バカ}か！」

スパーンといい音を立てて坂本の頭を叩く銀時。

「アッハッハッハ！厳しいのお」

その後もしばらく、桂と坂本、そして銀時の子どもじみたやりとりは続いた。

この息ぴったりの三人のやりとりに、微笑ましく思った剣心がぽろりと一言。

「三人はご友人なのでござるか」

「ちげーよ！ただの腐れ縁だこんなもん！！」

「おろ？」

第十訓 宴はみんなではしゃぐもの（後書き）

また間があきました。

その間に総合評価が3ケタに・・・！

ありがとうございます！

不定期更新で本当すみません。

こんなグダグダ小説ではありますが、今後もお付き合いいただけると光栄です。

神楽と新八がほぼ空気の件。

攘夷組を出すと他の人はもちろん、剣心も絡ませ辛い。

キャラクターを動かすのってムズカシイ。

次回予告とかあんまり好きじゃないですが、

次辺りから本筋に触れていく展開になるかと思われます。

第十一訓 襖にだって耳はある（前書き）

坂本のおごりで銀時達は料亭にやって来た。

くつろいでいるとそこに攘夷志士の桂が現れ、何やらにぎやかになったが・・・

第十一訓 襖にだって耳はある

宴もすっかり鎮まった深夜。

灯りは既に消され、薄暗い室内をすやすやと寝息が満たしていた。

主に神楽あたりがあまりに騒いでいたために、部屋はあちこちに物が散乱している状態だ。

そんな騒ぎから離れた様子だった剣心も、坂本に勧められるままに酒を呑んでいたせい、今は壁にもたれ、刀を抱えたまま眠っている。

よほど疲れたのだろう。神楽も新八も、疲れて横になったそのままの体勢で眠っていた。すやすやと眠る姿は微笑ましい。

銀時は、そんな子どもたちの様子を、隣室に続く襖の影から眺めていた。

「よく眠っているな」

奥に控える桂が口を開いた。

「ああ」

銀時もそっと微笑むと、静かに襖を閉め、くるりと振り返った。

襖で隔たれた部屋にいるのは、銀時、桂、そして坂本の三人。一番奥に控える坂本の隣には、行灯が据えられ、部屋を照らしていた。

「で？辰馬。桂まで呼んで俺たちに話って何だ」

銀時は坂本の隣????桂の向かい側にどかりと座った。

「ん、おまんらの耳にも、入れちよいた方がええと思つての」

そう前置きして、坂本はパン、と胡座をかいた両腿を叩き、丸いサングラスをツイッと押し上げた。

「近頃宇宙で騒がれちゅう、ある鉱石の話じゃ」

「石？」

坂本の言葉に、ふたりは眉をひそめた。

「何でもそんな石は限られた星でしか採れん珍しい石でう。取引自体も珍しいて、今わしら商売人の間じゃあ喉から手が出るほど欲しい金なる木じゃあゆて噂されちゆう」

「いいねエ、金なる木。俺もがっばり儲けてみてーや」

銀時が茶々を入れる。

「じゃがそいつはちいとばかり厄介な所がおおてのう」

「厄介とは？」

桂が先を促した。

「そがあ内に秘めちゆう莫大すぎるエネルギーじゃ」

坂本のサングラス越しの目から、笑みが消えた。

「聞いた話じゃあ、空間ばねじ曲ごうたり、ブラックホールばできたりとえらい危険じゃあゆてのう。すぐにそんな石の取引ば宇宙規模で制限されるようになったんじゃ。限られた機関でくわしゆう研究するゆての」

「お偉いさんのやる事ア何処に行っても同じだねエ」

「ところがじゃ。そいつが色んな検問の目ばすり抜けて、どーも地球に、それも大量に流れちゃう話ば聞こえて来るようになったきに」

「この星にか」

銀時も桂も目を瞬いた。いくら天人の技術で大いに発展しているとはいえ、所詮は辺境の星。いくら最新の研究機関と言われようと、天人のそれに比べればまだまだその足下にも及ばぬのは動かしようもない事実だ。

「そがぁに珍しーもんが、この辺境の星に大量に流されゆうのが気になっての。調べてみたら、そのうちの半数以上が地下に流れちゃうんが判ったんじゃ」

「吉原か」

銀時が苦い顔をする。視線を僅かに襖の方へずらしたが、桂が口を開いたためにふたりがそれに気付く事は無かった。

「その話なら俺も聞いた。どんな物かはまだ聞いておらんだったが、何やらこそこそと地下の方へ物資を運び込む怪しい天人集団がいるとか」

「天人集団ねえ・・・どんな奴らだ？」

銀時が桂に先を促した。

近藤や土方たちにしつこく当たらなかったのも、こちらの伝手があったからだ。銀時の思った通り、桂も既に天人集団の正体をつかんでいるらしい。

ひとつ頷き、桂は話を続けた。

「宇宙海賊『紅雪羅』」。

『春雨』のように大規模なものではないが、こちらも宇宙を股にかける宇宙海賊だ。いや、連中の海賊行為を見ると『春雨』のほうが大人しいかもしれん。なんせ奴らの目的は、狙った星を破壊する事を楽しむ事。理想も何も無い」

桂の話に、思わず舌打ちが出る。

「よりにもよって質の悪い・・・吉原じゃ今失踪事件なんかも起きてんだぜ？百華は今手が回らねえ」

面倒なと言わんばかりに乱暴に銀の髪をくしゃくしゃと掻いた。月詠が無理しそうな話ばかりである。

「ふむ、吉原界限の事情はお前の方が詳しそうだな、銀時」

何か思案するように、桂が言う。

「いつ頃からその失踪事件ちゃうんが起きゆうがかわかるかや？」

まあな、と桂の言葉に相づちを打つ銀時に、顎に手を添えてこちらも何か言うところがあるのか、坂本が問いかけた。

「たしか・・・一ヶ月ちよい前、つってたか?????何、何か関係あんの?」

銀時の返答に、ふたりの雰囲気難しいものに変わる。

「さっき言った石もな、そんな頃から地球ば流れ始めちゃう話じゃった」

「紅雪羅の天人どもが流れ込んで来たのもその頃との情報だ。これは、何か関係があると見ても良いだろうな」

「なるほどな」

そう言うとき銀時は、すっと立ち上がった。

「銀時?」

突然立ち上がった彼に、桂も坂本も疑問符を浮かべる。銀時はそのまま音を立てずに神楽や新八らが眠っているであろう部屋への襖に手をかけた。

「ここから先は当事者にも話に加わってもらおうと思ってよ?????」
「???なあ・・・」

襖が開かれる。

その先にいたのは、刀を肩にかけ、部屋と部屋を結ぶ襖の傍に腰掛けた赤い長髪の青年？？？？？

「緋村さんよ？」

剣客の瞳が、声の主を見上げた。

第十一訓 襖にだって耳はある（後書き）

また一ヶ月開きました。

もうちょっと書きたかったんですが、長いやらまとまらないやらで分割した次第。

・ 土佐弁ばわからんもんじゃきー 坂本さんでシリアスはキツイぜよ・

第十二訓 街の名前は急に変わってもなかなか馴染めない（前書き）

宴もすっかり落ちついた深夜。

桂、坂本、銀時の3人は、別室で話をしていた。

最近宇宙で騒がれている鉱石の話。

それを秘密裏に地球へ運び込む怪しい天人集団？？？？『紅雪羅』。

吉原で起きている事件とも時期が近い事から、何かのつながりを予想した銀時は、吉原の事件の当事者でもある剣心を自分たちのいる部屋に招いたのだった。

第十二訓 街の名前は急に変わってもなかなか馴染めない

「お前・・・」

桂が思わず声を漏らす。

今の今まで?????銀時が襖を開けるまで、全く気付けなかった。それは隣に座る坂本も同じなようで、わずかに開いた口がそれを示している。

「極限まで気配を殺していたのでござるが、真選組隊士たちを軽々と平伏せてしまう腕といい。やはり、ただ者ではないようござるな」

普段よりも声のトーンを落とし、剣心が口を開いた。

その台詞に銀時が口の端を持ち上げる。

「まあそう言ってやるなよ。あいつらは攘夷戦争が終わった後にできた組織らしいからな。対テロリスト程度の戦闘しか知らねーんだよ」

「そんでのーても銀時は人の気配ば読むのがいっとー巧いきに。あんまり気にする事なか」

坂本がぼりぼりと指で頬をかく。

「お主らの太刀筋は、やはり戦を経験した者の剣でござったか」

ふ、と剣心が微笑みを見せる。

「そう言うテメーも、相当修羅場越えて来てんじゃねーの？???
???まあ、入れや。ガキどもが起きちまう」

そう言って銀時は剣心を手招いた。ちらりと剣心が見やれば、今なおすやすや眠る新八と神楽。起こしてしまうのは確かに忍びない。刀を片手に、剣心が奥の間に入ってくる。

それを確認して銀時は開けた時と同じように静かに襖を閉めた。

「して銀時、当事者というのは一体どういうことだ？」

剣心が座り、銀時がもとの位置に戻って来るなり桂が口を開く。

「ああ、月詠の話じゃ、吉原で起きてる行方不明の連中と一緒に、身元のわからねー流れ者も出てんだとよ。時期も一緒とくりや何かつながりがあるかもしれないねーだろ」

「このご時世に身元が分からんとはどういうことじゃ？」

天人の技術の導入で、情報が溢れている中、突き止められないものの方が少ない。

「俺もその辺気になって、その流れモン?????ツつっても、百華や日輪の計らいで、元浮浪者の奴が多いんだけどよ?????そいつらにハナシ聞いて回ったんだ。そうしたら面白いことに、みんな聞いたこともねー街の名前を口にするんだよ。緋村もそのひとりらしくてな」

「聞いたことの無い街の名、とは？」

首をかしげた桂は、剣心の方を見やる。

「それは、『東京』のことではござるか？」

剣心の言葉に銀時が頷く。

「『とうきょう』？日本のどの辺りかや？」

顎に手をやりながら坂本が問う。剣心は少し戸惑ったような表情を浮かべた。

「おそらく、ここ、江戸と同じ場所になるはずでござる。拙者の知る東京という場所は、元々江戸という名だったと記憶しているのだが・・・」

「それはまた・・・」

「だろ？他にも江戸なんて時代遅れだの、今は華の明治の時代だのワケわかんねー事ばかりでよー。何より吉原に現れたる直前の状況が似通ってやがる」

「直前の状況？」

「どういうことじゃ」

「つーワケだ、緋村」

銀時はにやりと口端をつり上げて言った。

「こいつらに話しちゃくれねーか？オメーがああ吉原に迷い込んだその時の経緯とやらをよ」

剣心はしばし銀時を見、そして「承知した」と頷いた。

「拙者も、身の回りに起きた事が多すぎてまだ解らぬ事が山ほどあるでござる。差し支えなければ、教えてはいただけぬでござるか」

「この場所は、この国は、一体どういうところなのかを。特に、先刻からも話にあがっている、『あまんと』とは一体何者なのかを」

第十二訓 街の名前は急に変わってもなかなか馴染めない（後書き）

ようやく剣心がお話に本格的に絡んで来ましたよ。

な、長かった・・・

第十三訓 チンピラは大体主役にすぐ倒される（前書き）

剣心を交えて密談を再会した銀時、桂、そして坂本。

銀時らの世界の話をすることを条件に、剣心は吉原に迷い込んだ時のことを語りだした。

第十三訓 チンピラは大体主役にすぐ倒される

白い雲の漂う空。

天高くを舞う鷹の声。

両手に緑の生い茂る散歩道を、赤い長髪を後ろでひとつにまとめた短身痩躯の青年が歩いていた。

左頬に十字の刀傷。そして、その腰には一振りの刀が下げられている。

「帰って来た、か・・・」

青年????剣心は、空を仰いだ。

少し前の話になるが、彼は、彼とその仲間たちは、とある理由で京

都にいた。

その理由は？？？？志々雄真実。

幕末の頃、かつて裏世界の人斬りの任に就いていた剣心の、その後継となったもう一人の人斬り。裏世界のことを知りすぎたために闇へと葬られかけ、その恨みから新政府に反旗を翻した男。

剣心は、剣心を始めとしたその仲間たちは、その野望を打倒すべく、彼が組織した者達と因縁の京都において長い戦いを繰り広げていたのだった。

辛くも勝利を手にした剣心たちは、しばし京都で傷を癒し、そして先日、ようやくこの東京に帰って来たところだった。

流浪人としてしばし各地を転々としていた身としては、この帰って来た、ということ自体久しぶりの感覚だった。

買い物がてら、ふらりと竹林のそばを通りかかった頃だ。

なんだ・・・？

妙な気配を感じて、路を外れ、林の中に踏み入る。

10間ほど歩いた頃だろうか。何やら、ぱりぱりと小さな雷のようなものが這う場所にやって来た。それ以外には、何の変哲も無いただの林。木漏れ日が美しく、木々のざわめきも耳に心地良い。しかし

戻った方が良さそうでござるな

それは、勘。

よくは解らないが、そんな気がした。

急いで踵を返し、もとの街道へ戻ろうとして、その足下に、痺れるような痛みを感じ、思わず跳躍して後退した。

それを見計らうように薄暗く透明なドームが剣心を中心にして現れる。

「なに・・・!？」

バチッ バチッ

ジ ジ ジ ジ ……

バチバチという音が大きく、激しくなる。

それに伴ってまわりの景色が歪みだした。

続く、激しい閃光。

そこで、剣心の意識はブラックアウトした。

「ここは・・・？」

気が付くと、どこか見知らぬ町の路地裏のような場所だった。この近くでは、祭でもやっているのだろうか。随分にぎやかな調子も聞こえて来る。

何故か傷む身体をさすりながら、ひとまず立ち上がり、土ぼこりを払う。剣心の周囲には、あの竹林にあったような土と、何で切ったのか判らないような切り口の竹が数本。

「
」

話し声？　？　？　？　？　ひとまず道を聞くか

にぎやかな音に混じって、何やら聞こえてきた人の声がする方に歩を進める。

建物に取り付けられた見たことの無い金属の箱や筒などを見てなんだろうと不思議に思いながら、しばらく歩いていく。そして？　？　？　？　？

「やめて！　誰か！！」

悲鳴！？

不意に聞こえた悲鳴に、剣心は駆け出した。そして見つける。

何やら随分身なりの良いが、色っぽいなりの女性と、顔を真っ赤にしたガラの悪そうな男だ。

「おい」

剣心が声をかけ、2人はこちらに気付いたようだ。

「んだあ、テメーは」

男が剣心をなめつけるように上から下へと睨みつける。顔が赤くなっているところを見ても、どうやらだいぶ酔っているようだ。

「拙者は流浪人、何がどうなっているか判らぬが、その手を離してさっさと立ち去るでござる」

「テメーには関係ねー！怪我したくなきゃ、さっさと失せな！」

女性を掴んでいない方の腕をブン、と振り回し、少々よろけながらも剣心を怒鳴りつける。

「た、たすけ・・・」

女性の方は必死で助けを訴えている。

「関係はなくとも、目の前で助けを求めるものを放っておく訳にはゆかぬ」

「チッ、浪人風情が、去ねやああああ！」

男は、懷から小さなナイフを取り出し、剣心に向かってきた。そのナイフはブン、と剣心がいるはずの場所を薙ぐ。

「き、え・・・」

剣心が消え、呆然とする男。

男の上に、ふわりと影が落ちる。

飛天御剣流?????

その影に気付いて、男が空を見上げると、剣心が逆刃刀を振り降ろすのは、ほぼ同時だった。

龍 鎚 閃 ！

どさりと倒れる男。

ふわりと舞い降りるように着地する剣心。

逆刃刀を仕舞い、未だ怯えている女性に声をかけた。

「怪我は無いでござるか？」

「あ、ありがとうございます」

「これは・・・！」

ざり、という微かな音とともに、別の若い女性の声がして、剣心はそちらを向いた。

そこにいたのは亜麻色の髪を後ろに結いまとめた女性。黒を基調にした右袖の無い着物には、紅葉紋様が織り込まれている。それは目見麗しい女性だが、どこか違和感を感じる。剣心がその女性の顔にあった傷に気付いた時、先程の浪人風の男に絡まれていた女性が、彼女の方へ駆け出していた。

「月詠様！」

そう呼ばれた女性は、絡まれていた女性にいくつか言葉をかけて労る。それをぼんやりと見ていた剣心。ふと、その月詠と呼ばれた女性と目があった。

「・・・ぬしがやったのか？」

警戒の色をにじませ、月詠が口を開く。

「其方は？」

「わっちは、吉原自警団『百華』頭領。月詠にありんす。遊女を助けてくれた事、礼を言う」

「いや、拙者は大した事はしてない故。これで」

「待ちなんし。ぬし、初めて見る顔じゃな。吉原は初めてか」

剣心が踵を返し、立ち去ろうとするところに、月詠が声をかけてきた。

ここは、吉原というのか。一度は大火で焼け落ちたと聞いていたが、随分、大きな町へと変貌したのでござるな

今いる街の名を頭の中で反芻する。

「そうでござるが」

「・・・何処から来た」

眉をひそめ、月詠が慎重に言葉を選ぶように問いかけて来る。

「何処と言われても・・・ああ、そう言えば道を少々尋ねたいのでござるが」

おかしなことを聞くものだといぶかしみつつ、質問に答える。

「ここは、東京のどの辺りになるでござるか？」

すると月詠は、おもむろにハア、とため息をつき、頭に手をやった。

「ぬしもか・・・」

「おろ？」

第十三訓 チンピラは大体主役にすぐ倒される（後書き）

ようやくと剣心の回想シーンですよ。

本文にあるように、京都編の後あたりの剣心でした。

アニメしか見てないんで記憶が大分曖昧ですが。

月詠さん久しぶりに出てきました。

うん、郭詞難しいよ。

土佐弁も大概わからないですけどね。

第十四訓 人が考えた数だけ世界は存在するかもしれない（前書き）

桂、坂本、そして銀時による真夜中の密談。

その密談に剣心も加わり、吉原で起きている事件の片鱗が少しずつ姿を見せ始める。

密談の最中、剣心がこれまで黙秘を続けていた、吉原に流れ着くまでの経緯を語る。

雷とともに見知らぬ場所へ飛ばされた、その経緯を・・・

~~~~~  
???

侍の国

そう呼ばれていたのは今は昔の話。



二十年前、突如として宇宙から飛来してきた天人の台頭と、廃刀令により、侍は衰退の一途をたどる。

そんな時代に、不屈の侍魂を持つ男がここに。

その名は????桂小太郎。

ってオイイイイ!

何やってんのヅラアアアア!

金時の言う通りじゃ。一体どげんこつから始める気ぜよ。まったく、そこがあとこから始めちよつたら、キリがないじゃいか。いつまでたっても終わりが見えんぜよ。

そこじゃねエエエエ!

いや、確かにそこも突っ込むところだけど! 違うだろ!? そこはそれ、俺の事だろ!? 侍魂を持つ男、その名は坂田銀時だろオが! 何勝手にテメーにすり替えてんだヅラコノヤロオオオオ!

ヅラじゃない桂だ。俺はただ、緋村殿にこの世界の事を判りやすく説明しようとな???

だからって何捏造してんだテーマは！どっから始める気だコノヤロ  
ー！

いいではないか。大体、新訳紅桜編でも新八君がやっていただろう。  
今更ではないか。

途中までな！オープニングにちよろゝツとな！

っていやいやいやちよつと待てヅラてめー。それ映画ネタだろ  
？去年の春にやってたヤツのネタじゃねーか。DVDも12月半ば  
に出たばっかだったのに、こんなところでネタバレしたら、まだ映  
画をチェックしてねーこれ読んでる奴らが、がっかりすんじゃない  
か！

アハハハハ。大丈夫じゃろー。これ読んでくれちよる人はもうき  
ーピーくまはチェック済じゃろうち、大いにネタバレなりポロリなり  
すればいいぜよ。

オメーは何言ってたアアアアア！

てめ、そのピーはアレか！？ジョイスティックのことじゃねーだろ  
ーな！何ついに禁断の扉開いてんだよ！ここの管理者に下げられる  
だろうが！

心配ない。ここの作者が怠けに怠けまくって掲載がずるずる延びた  
からな。ほとんど1年近く前の情報だ。そろそろ解禁になってもお  
かしくない。

ヤメろおおおお！このおまけ書き始めたのは一応昨年末だから！  
その時はまだ旬だったんだよ！

そもそもだな、このような話は、この小説を読んでる者には不要ではないか。一話目とか、三話目などの様に『詳しくはコミックスを以下略』で良いだろう。

だったら最初っからそうしろよオオオオ!! わざわざこんなところでやるこっちゃねーだろーが!

つかさア。これさア。本来全部新八の役目だろーが。何で俺がツッコミやってんだ? 何俺に全部やらせてんだ作者コノヤロオオオオオ!!!

・・・拙者の話を進めても良いのでござろうか・・・

## 第十四訓 人が考えた数だけ世界は存在するかもしれない

「その後、あの吉原の町を丸ごと覆うような天井を見つけて、ようやく何かおかしいな場所にいるのだと気付いたのでござる」

剣心が話し終え、場に一時の沈黙が降りた。

「雷、歪む景色・・・」

「他の奴らの証言も似たようなモンだった」

ぽつりと声を漏らした桂に続いて、銀時もふわふわの髪を掻きながら口を開いた。

「こんだけ口を揃えて来られちゃあ、何かあるんじゃないかとは思っちゃいたが、なにがどーなってるのかさっぱりだ。けどまあ、辰馬の話で何となくその原因がわかったわ」

「成る程のう、確かにわしが聞いた鉱石のつくりだすモンの話と一致しちゅう」

顎に手を当て思案する仕草の坂本。

「かもしれねえ。そいつは吉原に運び込まれてんだろ？」

銀時が頷き、桂の方に視線を送る。

「うむ、連中が何かを秘密裏に運んでいる所は確認している。警備の規模から見ても、おそろく」

「次元だか何だかを越えたツツーんなら、緋村たちの言う東京って場所がわかんねーのも、多少は納得できるし？」

「つまり、この江戸という街は、拙者が知る街、いや、拙者の知る世ではないということでごさるか」

「別の世界、パラレルワールドという奴だと」

「そういう事。あんだだけ腕が立つんなら、噂話のひとつでも立ちそうなモンだしな？？？？赤い髪の十字傷なんて、特長の塊だろ」

確かに桂や坂本然り、日本人は基本黒髪黒目。剣心や銀時のような色は珍しく、何かあれば噂話のひとつやふたつ立ちそうなものだ。

「銀時が他人の腕を認めるなんて珍しか。まあ、真選組の一番隊隊長を倒したときの剣筋は、見事じゃったがのう。あんな剣は見た事なかったき、えらい驚いたわ」

脳裏に描くのは、昼間真選組の屯所で見た刃の煌めき。殺戮の為に研ぎすまされた技でありながら、その白刃の軌跡は見事としか言いようがなかった。

「腕の立つ侍ならば、名は広まらずともまずその容姿から人の噂が

立つ、か。お前が良い例だったな」

坂本と桂の二人もそこには同意する。

銀時が肩をすくめた。

「で、その後は、ひのやで厄介になっていて、今に至るってところか」

「うむ、他の身元不明となっている者は、人手が足りない店などで細々と仕事をもらっていたようでござるが、拙者についてはそのような処遇に」

「まあ得体の知れない腕の立つ剣客なんて、そこらにほっとけねーだろうからな。手元に置いて監視か？？？？まあ、良い判断なんじゃねーの？フツーなら」

「今は、色んな問題が吉原に集まっちゅう。浪人ひとりに手をかける事はできなかったんじやろ」

「それで吉原に何かと縁のある銀時に声がかかったという事か」

ここで一度区切り、桂は嘆息した。

「しかし、先日の蜘蛛手の地雷亜のことといい、鳳仙の事といい、またとんでもなく厄介な事に首を突っ込んでいるようだな」

ひらひらと手を振る銀時。

剣心はそんな銀時にそつと目を向ける。

この世界に来て、吉原と歌舞伎町、ふたつの町に住みつき、疑問に思ったことがいくつもある。その一つは、銀時が、元の世界でも名だたる色町と名を馳せている吉原と接点を持つことだ。初見においても、花街の明らかに高位にありそうな女が、あるいは武装を施した百華の女が、親しみを持って銀時に声をかけていたのを目にしている。当然、彼女らにこれと言った共通点は見当たらない。

一体どんな関わりがあつたのだろうか。

「それにしても、天人のいない世界とはな」

クスリと微笑む桂の声に、剣心ははたと顔を上げた。

「代わりに海の向こうの国が、のう・・・ あっちの方は、まだ江戸の発展ぶりには遠く及ばんき。にわかには信じられんぜよ」

坂本が顎に手をやり、何やら思案するような仕草をしながら言葉を発する。

「拙者も驚いているでござる。黒船来訪が、海か宇宙そらかでこうも時代は変わってしまうものなのかと」

脳裏に浮かぶは、元の世界、東京の町並み。外国から渡来して来た技術や文化によりかなりの部分が変貌し、栄えた。しかし、今いる

この世界、江戸の町並みは、名こそ元の地名ではあるが、東京とは比べ物にならない発展を遂げている。

「まあ、この江戸にターミナルが建ったつーのが一番の理由だろうな。何せありゃこの星の玄関みてーなモンだ。あのバカデケー塔から、今ある全ての天人の文化が直に入って来てるつつつても過言じゃねー」

「この国の、というより、この星の港町、ということでござるか」

「そういう事」

「その代わり、江戸城に大砲をぶち込み、無理矢理開国を迫るといふ暴挙に出おったがな」

不満顔の桂。

「まあ、あん頃は完全になめられちよったき、仕方なかる」

「仕方無いで済むか。おかげで不平等な条約は結ばれるわ、幕府は天人どもの傀儡と成り下がるわ、銀時は攘夷に戻って来ないわ、坂本は相変わらず宇宙にうつつを抜かしておるわ???」

「オイ、何さりげに人を勧誘してんだコラ」

桂のグチに銀時の頬がヒクつく。

「ヅラはいくつになっても固いのお。もっと高いところから見んといかんぜよ」



「だからといって、宇宙進出などにうつつを抜かす貴様もどうかと思うがな」

ため息をついてみせる坂本に、桂が返す。

「おいおいおめーら、今そんな堅苦しー話してんじゃねーよ。終わらねーだろーが」

また始まった、とばかりに銀時が口を挟んだ。む、と銀時を睨む桂。

「貴様が緩すぎるといふのだ。今からでも遅くはない。すぐに攘夷に参加して――」

「だから、なんで途中から勧誘になってんだよコノヤロー」

「桂殿は、彼ら天人を追い出そうと考えておいでか？」

銀時らのやりとりをしばらく見ていた剣心だが、桂の言動に、ぽつりと言葉を漏らした。

その問いに、坂本も銀時もぱたりと口を開くのをやめる。桂もまた口を開くのを止め、しばし剣心を見る。

僅かばかりの沈黙が流れた。

「・・・一時期は、そんな事を考えていた事もあった」

ぽつりと、桂がその沈黙を破る。

「全てを灰燼とし、ここを焼土としようと意気込んだ事もあった。  
だが――――今は、違う」

彼の纏う空気が、僅かだが変わった。

「今は、こんな腐った世にある町でも、それでも俺にとって大切な  
ものができた。それを壊そうというのなら、好き勝手はさせんさ」

その瞳に映るは、強い意志＞ひかりく。それは、剣心が知る色に似  
て、全く違う色をしていた。

「紅雪羅の動向を探るのはまかせてくれ?????更なる被害者を  
出さぬためにも、対策は打つ」

「わしは鉱石の流れば調べるぜよ。商売人はこういう物の流れちゅうに敏感じゃき。すぐわかるろ」

「銀時と緋村殿はその他の線からの聞き込みを頼む」

「金時は江戸で顔がようきききのう」

銀時は一見ただのちゃんぽらんだが、江戸での顔は意外なことに滅法広い。攘夷志士から商人、真選組などが最たる例で、一方だけじゃ無い、多種多様な方面からの情報が入って来る。

そのほとんどが仕事がらみで得た伝手なのだから、万事屋という怪しい商売も、案外馬鹿にはできない。

「辰馬ア、テメー何度言わせんだ。ヅラはどうでもいいが、俺の名前まで間違ってたらお前これアレだぞ？原作だけじゃない、この小説のタイトルまで大変なことになるぞ？ふざけんじゃねーよコノヤロー」

「ヅラじゃない桂だ。てゆか、人の名前はどうでもいいとは何事だ貴様」

「こんまいことはいいきに、のゝ、剣太くん？」

「剣心でござる・・・」

「あり？」



#### 第十四訓 人が考えた数だけ世界は存在するかもしれない（後書き）

ご無沙汰しました。タツバです。

色々、話まとまらなくて、延びに延びました。

元は一話のつもりで書き始めた話だったとしても、やはり二話を一度に出そうとするのは良くない。うん。

まったりゆっくり不定期更新。

**第十五訓 何気ない一言が決定打になることだってある（前書き）**

剣心から吉原へ流れ着いた経緯を聞いた銀時たちは、今後の話を練り始める。

それぞれのうちに、剣心の世界の話を中心に留め置きながら・・・

## 第十五訓 何気ない一言が決定打になることだってある

「しかし、当面はこれで良しとして、問題は奴らに仕掛ける際どうするか、だな」

紆余曲折あって、桂が話を戻した。それを受けて、坂本がぱっと顔を上げた。

「わしはやっぱり、高杉の奴にも協力して貰いたいところじゃのう。こんまい作戦ば立てゆうんはあいつがいつと一巧かったき」

この世界でも『高杉』さんと『桂』さんは繋がっているのかと桂と銀時の方を見たが、剣心の意に反して、二人の表情は暗かった。重い沈黙が流れる。

「・・・なんじゃ、おんしらまーだ喧嘩しちよったんかや。ええ加減にさっさと仲直りしとーせ」

銀時と桂の反応に、辰馬は大きなため息とともにがくりと肩を落とし、居住まいを崩した。

桂率いる攘夷党と高杉率いる鬼兵隊とが衝突した話は、坂本も掴ん

ではいた。だが、時間も経っていることだし、形はともあれ、何らかの終焉は迎えているものかとも思っていたのだ。予想は否らしい????このふたりがこの調子では、高杉をこの問題に引き込むのは難しい、いや、不可能か。

「仲直りったってよオ、奴はもうこういうのに協力なんざしねーんじゃないか？」

がしがしと髪を掻く銀時。

「あいつの目的は、最早この世界を壊すことだからな」

桂も腕を組んだまま、俯いた。

「まさか、紅雪羅にその高杉という人物がいるということとは」

予想外の二人の言葉に、剣心はうろたえた。世界を壊すとは物騒極まりなく、まさに紅雪羅の目的と同じではないか。

だが、それに反して銀時はひらひらと手を振る。

「いいや、あいつはシなマネしねーよ。まあ、宇宙海賊に手エ出したっつーのは当たってるがな」

「高杉なら、そう簡単にどこに集まっておるかなど悟らせまい。そんなヘマをやる男ではないからな」



剣心の予想をあつさりと否定して来る二人。

「・・・随分、はっきり言うのでござるな」

「あいつのことは、俺たちが一番良く知っている」

「ま、腐れ縁って奴だ」

仲を違えているのならば、もう少し推測を交えそうなものではないのだろうか。こちらの世界の高杉を剣心は知らないが、一言では表せない、繋がりのようなものを感じられた。

「おんしらまっこと意地っ張りじゃのう」

坂本はため息をついた。

「まあ、なんとかなんじゃね？これくらいのヤマなら、俺たちだけで十分だろ。そもそも、あいつ捕まえるってーのだけでも骨が折れんだろ。つか、めんどくせえ」

「まっただ」

「・・・それが本音でござるか」

あまりの本音に、がくりと肩を落とす剣心。

「なに、あの愚か者を捜すことに時間を割くよりも、この事態を解決することに時間を割いた方が得策というもの。それに、一刻も早

く、緋村殿をもとの世界に戻してやらねばならぬしな」

そう言って、桂は剣心の方を見やる。

「かたじけない」

「気にするな。元はと言えば、俺たちの世界の天人が引き起こしたこと」

「奴らのせいでピンチなんは、わしらも一緒じゃきー。お互いさまじゃ」

「テメーのケツは、テメーで拭く。そういう事だ？？？？？それにこいつアもともと、日輪からの依頼でもあるからな」

「依頼、とは？」

銀時の言葉に剣心はたと首を傾げる。

「おいおい、元はと言えば、日輪が言ったことだろーがよ。テメーがもとの場所に帰れるように、俺たちで手助けをしてくれてよ」

そうだ、もともとは、日輪が銀時に依頼したこと。そもそも銀時と出会ったのも、日輪の仲立ちがあつてのことだった。

身の回りが目紛しく変わっていたことで、剣心はそのことをすっかり忘れていた。

「客の依頼は、最後まで面倒見る。万事屋つてのァ、そういう商売だ。だから、あんたはただ、大船に乗ったつもりで構えてくれりゃいいんだよ。そいつがどんな難しい依頼だろうと、どんなに不可能なこったろうと」

「この万事屋銀さんが、万事解決してやるぜ」

ちゃらんぼらんな姿ばかりだが、この男の、時折まとわせるこの空気が、あの2人の子どもたちを、ひいてはあの吉原の者や、歌舞伎町の町の人々を惹き寄せる所以ともなっているのだろう。

どうして、なかなかの器の持ち主ではないか。

まだまだ読めぬところも多々あるが、その読めなかった部分の一端を垣間見ることができた気がして、剣心は薄く微笑んだ。

一通り言ったあと、銀時は、（少なくともつきあいの長い桂と坂本の目には）少々照れくさそうにがしと髪をかいた。

「んじゃ、まあ話もキレーにまとまったことだし。いっちょ呑み直しといくか?????派手な祭の前祝いによ」

「何の前祝いですか？」

「あ？決まってんだろ、打倒べにせ・・・」

銀時が言い終わる前に、部屋を分ける襖がスパーンと左右に開かれた。

立っていたのはメガネを光らせた新八と、じと目をした神楽、そして何故か、もうひとり、編み笠にマント姿の女性が。

「あ、あらあ、新八に神楽ア・・・起きちゃったの・・・？」

思わず銀時が引きつった笑みを浮かべる。

「人が寝てる間にコソコソと・・・緋村さんまで引き込んであんたら一体何の話してたんですか。まさか下ネタですか？」

心底軽蔑した、という眼差しを剣心に向ける新八。

「い、いや違うでござるよ。実は・・・？」

剣心が口を開くと、どすん、と神楽が一步踏み出る。床がミシリ、というかバキリと音を立てて歪んだ。

「剣ちゃん！私見損なったヨ！剣ちゃんは絶対そんな奴じゃないって思ってたのに！いつからそんなふしだらだらになったネ！」

「おろお！？」

「いや、神楽ちゃん、ふしだらね」

「白状するネ銀ちゃん！剣ちゃんに一体何吹き込んだアルか！？」

「い、いやあ、だから神楽殿？その、銀時殿は決して」

剣心が銀時を弁護をしようにも、なぜか全て銀時の評価が落ちていくことに繋がっていく。普段どれだけ信用を失うマネをしているのだこの男は。

剣心と新八、神楽の横では、編み笠を被った女性が、坂本に銃口を向けていた。既に一発射ったあとらしく、銃口と、坂本の足下の穴から煙が上がっている。

「頭ア、いい加減にするぜよ。おまんの勝手な行動で、会社がどれだけ困るか、わかつちょうのか」

「アハハハハ、陸奥、おんし、何でこがぁ処に」

坂本の言葉が終わらぬうちに、陸奥と呼ばれた女性は、坂本の胸ぐらを掴み、がちやりと銃口を突きつけた。

「言い訳は帰りの船中でたっぷり聞ুকきに。ふぐりつぶされとうなかったら、おとなしく観念しい」

無表情で脅す坂本の腹心、陸奥。

「ア、アハハハハ 敵わんのお」

何とも言えない顔でそのやりとりを見ていた銀時だったが、その横で、不意に桂がため息をついた。そちらを向けば、桂と自然に目が合う。

「銀時、これはもうリーダーと新八君のふたりにも話すべきじゃないのか」

少々、諭すような言い方だった。

「だな?????じゃ、ツラよろしく」

そう言ってごろりと横になる銀時。

「ツラじゃない、桂だ。てゆか丸投げかよ！」

銀時たちが夜の密談をしたその数日の後。

「ここは・・・」

真選組のとある一室で、目を覚ました青年がいた。

まだ幼さの残る声。

青年は、ぼんやりと辺りを見やった。

見慣れない天井。

「気が付いたか」

不意に声をかけられ、彼はそちらを向いた。

人の良いゴリラのような顔が、微笑みかける。

「君は屯所の庭に倒れていたんだ。いやあ、驚いたぞ」

「貴方は？」

「俺か？俺は近藤勲。武装警察真選組の局長を務めてる。ここはその屯所だ。何があったかは知らんが、安心していい。ここは安全だからな」

「新選組？幕末に滅んだあの新選組、ですか？」

「滅んだとはまた物騒な話じゃねーか」

「トシ」

「・・・もしかして、副長の土方歳三さん？」



かけられた青年の言葉に、無表情ながらも土方の目元がぴくりと反応した。

そして思い浮かぶのは、先日遇った赤髪の男？……？

「ちょっと、話聞かせてもらおうじゃねーか」

鬼の副長と呼ばれる男の目が、鋭く青年を捉えていた。

## 第十五訓 何気ない一言が決定打になることだってある（後書き）

またとてつもなく間があきました。

皆さんお元気でしょうか。

タツバは何とか元気です。

なんやかんやでこの小説も、初掲載より1年を経過してしまいました。

まだ前半も終わってないよ。

三分の一ほど終わったか否かくらい。

相変わらずダラダラ長くなっておりませんが、今後もしろしくお願い致します。

次回…ついに、あの人が登場!?

今回の最後の部分でちょろっと出てきた人の口調だけでこの人だと

当てた人に拍手。

## 第十六訓 人の縁は意外なところで繋がるから不思議（前書き）

夜の密談をすませ、今後の方針を決めた銀時たち。

そこに寝ていたはずの新八や神楽、そして坂本を回収しに来た陸奥まで合流した。

結局三人にも紅雪羅の件を話すことになり、一段落することに。

一方、真選組の屯所では、とある青年が目を覚めたのだった。

## 第十六訓 人の縁は意外なところで繋がるから不思議

夜の密談から一週間が経った。

あの夜はその後、『ちよつとした』一悶着の後、何とかなだめた神楽と新八、そして陸奥を交えて事情を説明した。

宇宙に出回る危険な鉱石のこと。吉原に潜む宇宙海賊『紅雪羅』のこと。

その紅雪羅が、鉱石を大量に地球に持ち込んでいること。

その影響で、吉原で不可解な事件が発生していること

そして、剣心もそれに巻き込まれたひとりだ、ということ。

「仕事サボってこそそしちよつたのはその為じゃったか」

一通りの話を終えて、陸奥の盛大なため息を皮切りに、新八と神樂が騒ぎだしたのは当然の成り行きだった。

「剣ちゃんが無事に帰れるように、私たちで何とかするネ！」

「そうですね！僕ら、確かに未熟者かもしれないけど、困っているなら頼ってください。僕らの万事屋は、その為にあるんですから！」

というふたりの意気込みにも押され、ここ数日お出かけという名の調査が自然に増えていった。

進展は、ほとんど無いといえる。相手は仮にも宇宙海賊。当然と言えば当然なのだが、何の収穫もなく帰路につく新八と神樂のふたりのがっかりした様子は、見るに忍びない。

坂本は「情報収集はまかせるぜよ」と言いながら陸奥に引っ張られて行ったきり、音沙汰がない。

数日前に道で遇った桂曰く、大方これまで仕事をさぼっていたツケを（もちろん陸奥の監視のもと）払わされているのだろう、とのこと。その後、何やら可愛い娘がいるから云々と聞かれたが、新八と神樂がすたすたと歩き始めてしまったので、それ以降は話していない。

そして銀時と言えば、不定期にふらりと出かけては夜遅くに帰ったり、朝陽が昇る頃に帰って来たりと、密談前とあまり変わらぬ生

活を送っていた。

今日も今日とて、出かける前に新八とともに剣心が朝餉の後片付けをしていたころだ。

ピンポーン

万事屋の呼び鈴が鳴り、ふたりは玄関を見た。人影が3つ見える。

「お客人でござろうか」

人影を見て、剣心が言う。

「僕が出ますよ。緋村さんはそれ、頼みますね」

「ああ」

新八が台所を去って行くのを見送り、さて残りの物を片付けてしまおうと手をつけ始める。

あとはもう残りの食器を拭いて棚に収めるだけなので、すぐ終わるだろう。

今日は河沿いに海の方まで行くと言っていたから、早めに出たいとも言っていたことだし。早く終わらせるに越した事はない。

銀時殿はまたどこか別の場所へ出かけるとか言っていたが・・・

本日の予定を立てた時のやりとりのことを考えながら、剣心は手際よく片付けていった。

しかしその後、玄関で繰り広げられるやりとりの中で聞こえてきた『聞き覚えのある声』に、剣心は思わず手を止めることになる。

「はい、新聞なら間に合ってますよう……あれ、土方さん



？沖田さんも・・・そちらの方は？」

いつものように（？）玄関の引き戸を開けて、訪問者を出迎えた新八は、真選組の馴染みのふたりの後ろに、もうひとりいるのが目にはいった。

書生らしい格好は、すっきりとした淡い青系の色でまとめられ、背格好は新八と変わらないくらいだろうか。つかみ所の無い微笑みを常にたたえた青年だ。

「万事屋の野郎とあの赤い髪の野郎はいるか？」

こちらは瞳孔の開いた鋭い目つきの土方。紫煙を燻らせた煙草をくわえたまま、じっと新八を見下ろすような形で声をかけて来た。

「ええ、いますけど」

いつに無い真面目な声に、新八は戸惑いながらも頷いた。

「ちよっくら上がらせてもらうぞ」

「どーも」

「お邪魔します」

土方に続いて、平坦な声で沖田が、朗らかに青年が、新八に一声かけながら次々に履物を脱いであがっていった。

「え、ちょっと、土方さん？」

一歩遅れて新八がそのあとを追う。

3人はわき目もふらずに廊下を進み、奥の事務所へずかずか踏み込んで来た。

その事務所兼居間では、銀時が長椅子に寝っ転がってジャンプを読んでいた。神楽は右手側で定春と戯れていたが、沖田と目が合うと、バチバチと火花を散らしてにらみ合った。

「んだあ、大串君じゃねーか。何の用だ、ンな朝っぱらから」

銀時はジャンプを読む手を止めて上半身だけ起こし、訪問者に声をかけた。当然のように名前をわざと間違えて。

「土方だって言ってるだろうが」

土方が肩を怒らせる。いつもならしつかり否定するところだが、今日ばかりは一々こいつのペースに合わせてられない。というか、合わせたら最後、いつもの不毛な押し問答が始まるに違いない。

取りあえず深呼吸をして、なんとか精神を落ち着ける。

「何ですか、大串君って？」

ただひとり、そのいつものやりとりを知らない青年が、ことりと首をかしげて土方を見た。

「ん？そっちのガキは？」

初めて見る顔に、さすがの銀時も土方をちやかすのはやめた。

「あ、はじめまして、僕は瀬田宗次郎と……？」

「宗次郎殿？」

青年の自己紹介を、途中で遮る声。一同の視線が声の主に注目する。

見れば、事務所の入り口で、驚いた顔の剣心が突っ立っていた。

剣心に気づいて、宗次郎と名乗った青年は、元の微笑みをさらに朗らかに深くさせた。

「あれ？緋村さんじゃないですか。お久しぶり……？でもないか。こんなところで会えるなんて。奇遇ですね」

「全くでござる。お主も流れ着いていたのでござるな」

一月と少しぶりに再会した彼は、あいも変わらぬ微笑みをもって剣心の前に現れた。

瀬田宗次郎?????

かつて、明治政府転覆をもくろむ志々雄一派が誇る、戦闘集団『十本刀』のひとりだった男。志々雄の理想に共鳴し、一度ならず二度までも、剣心の前に立ちはだかった、剣客だった。

「やっぱてめーら知り合いか」

そう言って土方は、くわえていた煙草を口から離し、フウツと紫煙を吐いた。

「おい、どうせテメーの事だから、また何か妙な事件にでも巻き込まれてんだろ」

土方が、銀時を睨みつける。

その顔は、まさに鬼の副長と揶揄される通りで。

「この宗次郎ってガキから大体の事情は聞いた。テメーらの知ってる事を話せ。誤魔化すんじゃねえぞ」

今日ばかりは誤魔化しは許さない。

そんな鋭い視線をもって、土方が銀時を見下ろした。

しばし睨み合うふたり。

やがて深いため息が、その沈黙を破る。

「・・・しゃあねーな」

銀時は、がしがしと面倒くさそうに髪をかき、長椅子から起き上がった。



**第十六訓 人の縁は意外なところで繋がるから不思議（後書き）**

お久しぶりです。タツバです。

超がつくほどのスローペースで、本当に申し訳ないです。

そしていつの間にかお気に入り件数が3ケタに・・・！

ありがとうございます！

今後もずっと遅筆で不定期がつづくかと思われませんが、『銀魂剣客浪漫譚』を今後ともよろしくお願い致します。

## 第十七訓 詐欺とかするならまず見た目から行け（前書き）

万事屋にやって来た真選組の土方と沖田。この日は何やら見知らぬ顔の青年――――瀬田宗次郎を連れてきていた。

話を聞けばどうやらこの宗次郎という青年も、剣心のいた世界から来たという人物らしい。

宗次郎の話から、剣心との関連を睨んだ土方は、万事屋に知っていることを吐けと言ってきたのだった。



## 第十七訓 詐欺とかするならまず見た目から行け

それから数十分後。万事屋と真選組は、テーブルを挟んで対面する形で、銀時の話に耳を傾けていた。

室内にあるそれ以外の音は、新八が出してきたお茶を、机に寄りかかった沖田がずず、とすする音と、銀時の隣で神楽が酢昆布をぽりぽり貪る音くらい。

「つてな訳だ」

一通りのことを話し終え、銀時はそう締めくくった。もちろん出所が出所なだけに、桂に関する情報の一切を伏せて。

「また面倒なことに巻き込まれやがって・・・」

土方がイライラと舌打ちする。

「旦那ァ。本当どこから情報を仕入れてるんですかイ？俺らが紅雪羅の件突き止めたのは、つい最近ですぜ」

平坦な声で、沖田が言った。

「そりゃあまあ、企業秘密って奴だよ。こんな商売やってるとな、色んなとっから情報が入ってくんだよ。どうだ、参ったか、税金泥棒どもが。ちったア真面目に仕事しやがれ」

長椅子にふんぞり返ってちやかす銀時。

「チッ、コノヤローが調子に乗りやがって」

ハア、とため息をつきながら、土方はすっかり短くなった煙草をぐりぐりと灰皿に押しつけた。灰皿には他に2、3本の吸い殻がたまっている。

「しかし吉原たア、また面倒くせーところに潜り込みやがったな」

「面倒、とは」

忌々しそうに腕を組み、足を組み替える土方に、万事屋側の長椅子のそばに立つ剣心が問う。土方の隣に座る宗次郎も、微笑みに僅かな疑問符をのせて隣の土方を見た。

「お二人は知らねーでしょうが、あそこは治外法権みたいなもんなんで、俺たち幕府関係者は、下手に手出しができねーんでさア」

「前の楼主、夜王鳳仙がいたときよりは幾分かマシにはなったみてーだがな。相変わらず幕府が黙殺する場所には違いねえ。今のところは、その自警団とやらが睨みを利かせちゃいるが、この状態も

いつまで保てるか・・・」

沖田が剣心と宗次郎の方を見ながら答え、その続きを土方が引き取る。天人によって傀儡となっている今の幕府が相手では、太刀打ちできぬどころか、逆に都合の悪い道具として処断されかねない。

「さっさと片付けないと、被害の規模が膨れ上がる、かーーーーー  
仕方ねえ」

がしがしと頭を掻き、銀時が立ち上がる。そうして机のわきに立てかけておいた木刀を腰に差した。沖田が声をかける。

「旦那、何処へ」

「こんな話の流れじゃ決まってんだろ」

肩をひょいとすくめて、玄関へ歩き出す銀時。

「待て。吉原には自警団がいる。下手に嗅ぎ回ったら命はねーぜ」

銀時の方は向かぬまま、土方が口を開いた。

「大丈夫だって。言っただろ？ 銀さんの顔の広さなめんじゃねーよ」

こちらに向けて放たれた、意味ありげな台詞に、笑み。

こいつ、吉原にまで顔が利くのか。

吉原と言えば江戸一番の色町である。この万年金欠駄目男が、そんなところにまで根を張っているとは驚きだ。

最近のネタと言えば、謎の炎上事件くらいだが・・・

「銀ちゃんが行くなら、私も行くネ」

神楽もさも当然と行ったように腰を上げた。

「僕も行きますよ」

神楽のすぐあとに続く新八。

「なら、拙者も」

「あ、僕もご一緒していいですか？」

そうやって芋づる式に名乗りを上げる歳若い面々。それを見て銀時  
も大仰にため息をついた。

「おいおい、吉原って色町だぞ。お子様にはちよっと早いんじゃないね

「の？」

「今更じゃないですか。僕たちも、剣さんだっけっこう出入りしてますし」

「それにあそこには晴太だっているネ」

反論する新八と神楽。確かに色々あって、あそこはこのメンバーでよく足を伸ばしに行く町でもある。

「それもそうか。だけどよ・・・」

まだ渋った様子の銀時が、剣心と宗次郎の方を向く。その視線に気づいた宗次郎が朗らかに、続いて剣心が少々困ったように言った。

「大丈夫ですよ。僕も元服は越えてますから」

「拙者もこれで一応29でござる」

「「・・・・・・・・・・」」

しばし降りた沈黙を、最初に破ったのは銀時だった。

「ウッソオオオオ!!! テメーそのみてくれで29ウウウウウウ  
ウ!!!?」

「29って近藤さんと一緒じゃねーか!」

銀時に続く土方の台詞に、今度は剣心も驚いた。

「おろ！？あの御仁、そんなに若いのでござるか！？」

「随分老けて見えましたねえ」

「あんたらさりげに失礼だな！」

新八のツツコミが入る。

「ねえ、嘘だよね？そのなりで三十路一步手前ってどんだけ詐欺なの？あり得ねーだろその童顔！」

銀時が汗を大量に流して動揺している。

「てつきり総悟と同じかいってても少し上くれえだろうたア思っちゃいたが・・・」

土方が新しい煙草に火をつけようと、愛用のマヨ型ライターを取り出した。彼もその動揺のあまり、手が震えてライターの火がいくつもあるように見える。

「すごいネ剣ちゃん！人体の神秘アル！銀ちゃんの方が年下ネ！」

神楽が嬉々として声をあげる。

「本当、すげえや緋村さん。敬えよ土方」

「何でテメエが威張ってんだ！」



## 第十七訓 詐欺とかするならまず見た目から行け（後書き）

るろ剣と言えは一度は剣心の年齢ネタはやっとかないとな、と思ったので。

京都編終わった頃は29歳らしいです。（ウ●キ調べ）

近藤さんの歳もウ●キに載ってたのでそれを採用しています。

いや、ホントに同じ年とは思えないよなあ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4648/>

---

銀魂剣客浪漫譚

2011年11月20日23時21分発行